

令和2年度文科省「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

本人講座《キープセーフ for チェンジ》

一私の人生、グッドウェイモデルで行くよ!



「セルフアドボカシー支援に向けた地域包括支援プログラム」

《トラブルや人生の岐路に立っても、自分でグッドウェイを選択し、意思決定していき

る『私』を磨く本人講座》の開発

特定非営利活動法人 PandA-J

「セルフアドボカシー支援に向けた学習プログラムに関する取組」

2020年度報告書

石狩トラブルシューターネットワークの活動

3年間の取り組みのまとめ

金子 浩治 ◎P & Aいしかり

野田 宏 ◎地域活動支援センターえみな 石狩大地の会事務局

福地 充江 ◎地域活動支援センターえみな 石狩大地の会事務局

俵谷 知美 ◎地域活動支援センターアンナプルナ

【はじめに】

石狩トラブルシューターネットワーク（以下、石狩TS）は、平成28年3月に「トラブルシューター支援者養成研修がP & Aいしかりの主催で開催され、それを機に令和元年10月1日に石狩TSが結成された。

活動は以下の3つを柱として進めている。

1. 包括的な支援基盤およびTS人材養成
2. 地域におけるトラブル予防 に向けた取り組み
3. 本人支援としての当事者向けセルフアドボカシー講座の実施と支援者養成

（石狩TSの会則は別紙資料参照）

その母体となる「P & Aいしかり」は「障がいのある人のための権利擁護と地域でのセーフティーネットづくりを！」草の根運動的に進めていこうということで、平成22年10月設立準備会が発足し、平成24年12月に準備会から正式に「P & Aいしかり」が結成された。構成はNPO法人石狩市手をつなぐ育成会、石狩市障がい者支援センター保護者会、社会福祉法人はるにれの里からなっている。

障がい児・者が地域で生活する上で、様々の生きづらさがあり、障がい児・者への理解が地域に浸透していないことから、誤解や偏見などによるトラブルが生まれてしまう。街中では時おり、知的や自閉症の障がい児・者は物事を理解したり、表現することが苦手なために、「不審者」に間違えられたり、「犯罪者」にされたり、逆にトラブルに巻き込まれ、被害者になることもある。私たちP & Aいしかりは地域の中に彼らの良き理解者・サポーターを広げる活動をしてきて9年になる。この間、P & A大阪で作成したコンビニ



エコーネットの活動をしてきて9年になる。この間、P & A大阪で作成したコンビニ



向けパンフ等を活用して、毎年市内のコンビニ・スーパーにサポーター店の依頼活動をおこなっている。その際に何かトラブルや困ったことがないか聞き取り活動もおこなっている。その他、地域課題を取り上げ、共に考える集いや各種の取り組みをおこなってきた。(活動詳細は、P & Aいしかりホームページに掲載 <https://p-a-ishikari.jimdofree.com/>)

P & Aいしかりは、主に地域の中によき理解者を広げるための啓発活動や地域課題を共に考えセーフティーネットづくりの活動を主とし、石狩TSは「トラブル予防に向けた取り組み」を主に、本人支援としての当事者向けセルフアドボカシー講座の実施と支援者養成を主として、P & Aいしかりと石狩TSは両輪の関係で、地域の中で障がいのある当事者の権利擁護と地域におけるトラブル予防に向けた取り組みとセーフティーネットづくりを目指して活動している。



【これまでの3年間の取り組み】

《1年次 平成30年度の取り組み》

平成31年2月16日にPanda-Jから派遣で、九州南高愛隣会の南口氏、東京都立青峰学園大沼氏を招いて「暮らしのルールブック」をテーマに支援者向け講座を開催し、その後、地域活動支援センターアンナプルナ（札幌）で当事者向け講座も開催した。



《2年次 令和元年度の取り組み》

石狩TSでは「セルフアドボカシー当事者向け講座」を開催するにあたって、3つグループで当事者向け講座を進めた。

1. 石狩大地の会向け講座
(石狩大地の会役員会の主に知的障がい当事者向け)
2. 地域活動支援センターえみな講座（石狩）
(地活プログラムに定期参加している主に知的障がい当事者向け)
3. 地域活動支援センターアンナプルナの当事者向け講座（札幌）
(当事者研究に関わる発達障がい当事者向け)

尚、1.の石狩大地の会（当事者会）は、地域活動支援センターえみな（石狩）に事務局があり、毎月役員会がおこなわれている。

講座を進めていく上で、第1回支援スタッフ会議（10月1日地域協議会）で、石狩大地の会では本年9月に開催された当事者の人権セミナー実行委員にも加わっており、人権セミナー内容なども含めて考えようということで検討してきた。身近な暮らしでの生きづらさ、困り感も含め、共に考え合うということを中心に進めていくこととした。

さらに生涯学習推進コアメンバーの堀江まゆみ代表と小出薫氏（新潟TS・弁護士）と講座の今後の進め方についてTV会議（10月5日）で、「どう定着・持続可能なものにしていくか」「講座内容のポイントやどんな講座にしていくか」「キープセーフ+αで進めていくこと」「当事者たちとの座談会で意見を聞きいていく」等、協議した。

その後、石狩大地の会と地域活動支援センターえみなどでは、Keep safeをベースとした講座と地域活動支援センターアンナプルナでの当事者研究ベースでの講座を取り組んだ。

《3年次 令和2年度の取り組み》

コロナ禍のため、石狩大地の会のメンバー3~4名程度の小グループでの講座を実施した。

当事者が自分たちで講座のテーマを話し合って決めることを大事にして、「仲間との会話」「職場での会話」「仲間との電話」等4回の講座を実施した。その中で、当事者主体・意思尊重・意思決定支援を重視し、当事者が意思表出できる環境づくりと支援についての取り組みを進めた。



以下、これまでの石狩TSの3年間の取り組みを報告する。

【石狩大地の会向け講座のとりくみ】

（石狩大地の会役員会の主に知的障がい当事者向け）

《1年次 平成30年度の取り組み》

セルフアドボカシー講座に向けて、まず、「暮らしのルールブック」をテーマに支援者向け講座をおこなった。



《2年次 令和元年度の取り組み》

令和元年11月6日 第1回「危ない自転車の乗り方していいの？」（当事者7名、支援者9名）

第1回の石狩大地の会向け講座は、11月6日（水）「危ない自転車の乗り方していいの？」（当事者7名、支援者9名）開催した。初回講座ということもあって、生涯学習推進コアメンバーの平井威氏（明治大学客員教授）に急遽来ていただくことができ、セルフアドボカシー講



座をKeep safeをベースに進められ、支援スタッフにとっても初めての実践を学ぶ絶好の機会となり、以後の講座展開に大いに参考になった。

令和元年12月4日 第2回「話し方とことばづかいについて」(当事者10名、支援者7名)

令和2年1月8日 第3回「イジメについて」(当事者10名、支援者5名)

これらの各講座は以下の流れで実施した。

- ①研究の主旨説明と研究同意
- ②ウォーミングアップ
- ③賢者・ワル、分かれ道、2つの家のイメージ確認
- ④テーマの確認
- ⑤グループワーク
- ⑥賢者・ワルの発言確認
- ⑦発表
- ⑧まとめ



様々な意見が出て、グループワークでも活発な意見が出る事が多く、意見の少ない人も、他のメンバーの意見を聞くことは大変有意義な経験と感じられた。

講座終了後の当事者からの感想として、『グッとくるものがあった』『他の人にちょっかいをかけて遊んでいるとき、イラストを思い出し、考え直して行動ができた』『イラストは分かり

やすく、思い出しやすい。』『楽しかった。』『難しかった。』等という感想が聞かれた。

《3年次 令和2年度の取り組み》

コロナ禍のため、石狩大地の会のメンバー3~4名程度の小グループでの講座を実施した。参加される方の障がい特性を考慮し、イラストはシンプルにし着眼点が逸れないようなものを選び、学習会で使用した。



令和2年9月23日 第1回「仲間との会話」(当事者4名、支援者4名)

「仲間との会話」をテーマとして、以下のストーリーについて考え、話しあってもらった。

☆ストーリー☆

ヒロシさんの休みの日の朝、友達の太郎くんがヒロシさんのグループホームに来ました。

ヒロシさんは疲れていたもので、好きなテレビを見てゆっくり過ごしたいなと思っていました。

ヒロシさんは太郎くん「おはよう」と一言挨拶をただけで、テレビを見ていました。

しばらくして、太郎くんはヒロシさんに「話したいことがあるんだ」と言ってきました。

★ヒロシさんは太郎くんは何と言ったらいいでしょうか？★

★あなたがヒロシさんだったらどうしますか？★

★あなたが太郎くんだったらどうしますか？★

このストーリーについて第三者として考えてみる、またそれぞれの立場になって考えてみての意見を出してもらった。

迷った時には「分かれ道」で立ち止まって考えてから行動するという意識するために、一方の考えだけでなく、第三者としてのアドバイスを考えることを学習した。

内容が複雑であり、また初めて学習会に参加される方もおり、架空のストーリーに乗ることができず最後まで「難しかった」という感想で締めくくられる当事者もあり、支援者として猛省することになった学習会だった。

令和2年10月7日 第2回「職場での会話」(当事者3名、支援者3名)

令和2年11月4日 第4回「職場での会話」(当事者2名、支援者3名)

第2回目と第4回目は「職場での会話」という同じテーマで違うメンバー構成のもと実施した。

☆場面☆

仕事を一生懸命におこなっているのに、仲間から「ちゃんとやっていない」「さぼっている」と指摘されました。

★あなたはどう思いますか？★

★あなたはどうしますか？★

第1回目の反省を活かし、内容はシンプルにまた実際の仕事場面と絡めて考える内容にした。



指摘された人に直接言い返すのはケンカになるのでよくないという意見がどちらの回も共通して出てきた。また過去を思い出しながら発言する当事者もいた。『障がい者だからできない』と決めつけられたという辛い経験のある当事者もいたが、「今は職場の上司や支援者へ相談をする」「信頼できる人へ話をする」などの意見が出ていた。



令和2年10月21日 第3回「仲間との電話」(当事者3名、支援者3名)

実際にメールや電話トラブルを起こしたことがある当事者が参加者に入っており、架空ストーリー仕立てで行った。

まず、電話を受ける側のタロウ君と電話をかける側のイチロー君それぞれの気持ちを考える。そして、それぞれにどうアドバイスしたら良いかを考えて意見を出してもらうように設定した。参加者には電話をする相手がどんなことを考えるのかをイメージしてもらえるかをカギにした。

ストーリーではごく自然な電話の流れなので、「何が良くないのか」また「相手が困っていること」が伝わりにくいので、イチロー君が話を始めたらタロウ君はあからさまに機嫌が悪くイライラしていたなどの補足をした。「イチロー君は何を考えているのか?」「八つ当たりされた、困る、嫌だ」という気持ちを持つかもしれないというところから、今はタロウ君にとって都合の悪い時間帯だったかもしれないというところまで意見が出てきた。

一方でタロウ君の気持ちとしては、今は都合が悪い・気分ではなかった、でもそれを態度に出すのはあまり良くない等。

最後に考えを整理してから、イチロー君とタロウ君それぞれにアドバイスを考えてみるという流れで進行した。

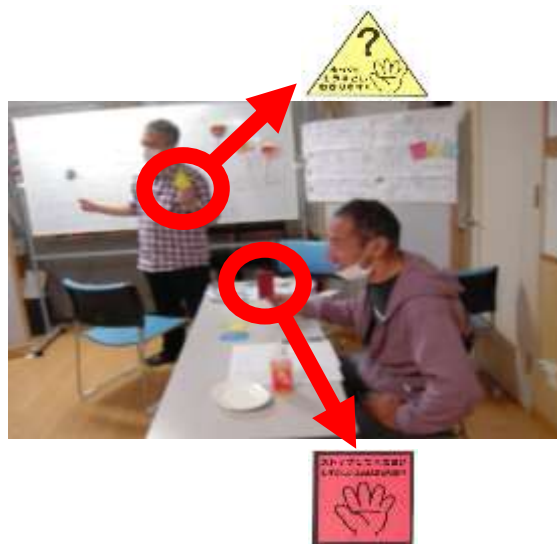
学習会の参加回数を重ねているためか、ロールプレイで演じることもスムーズにできるようになってきた。



(支援者がアバターを使っての説明後に、本人の意見をロールプレイにて演じる)

大地の会向け講座全体を通して

少人数での実施のため意見が出にくく進行に苦勞するのではないかと支援者側は心配したが、逆に大人数で発言しにくい方達が意欲的に発言することがみられたというメリットがみられた。



(支援者や他の参加者と考えが異なっても自分の意見を伝えられる)

講座テーマの話し合い（令和元年度）



昨年度はテーマ決めの話し合いで『イジメ』という言葉が出たが、漠然としたテーマであり内容が広すぎると支援者側で判断し、支援者が当事者のことを考えて、わかりやすいようにということとまた会員さん同士で言葉遣いによるトラブルがあることに着目し『言葉づかい』にアレンジしたテーマを設定した。

『言葉づかい』というテーマの勉強会は参加者さんからは「よかった」「勉強になった」という感想が聞かれ盛況に終えることができた。しかし次回のテーマ決めの話し合いをすると再度『イジメ』という言葉がでた。

支援者が当事者のことを考えてわかりやすいようにとテーマ設定したつもりでいたが、実際は当事者の思いとは異なっていたということの意味した。当事者が学びたいことを優先することの重要性にあらためて気が付かされた。

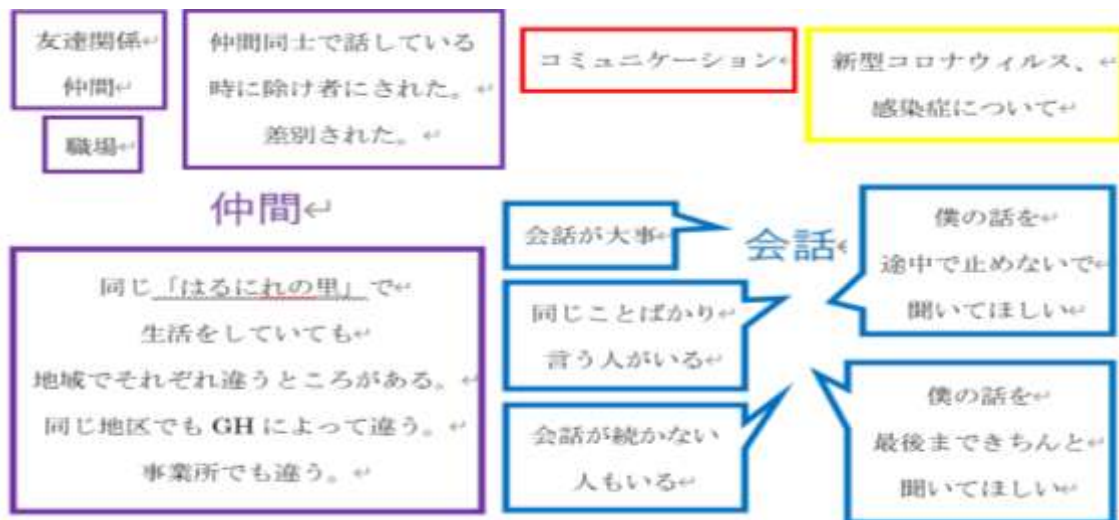
支援者の目線や思いが先行することなく、当事者の意思を尊重し、意思表示できる環境づくりと支援が重要であることをあらためて学んだ。

講座テーマの話し合い（令和2年度）

昨年度の反省を踏まえ今年度の学習会の内容については、大地の会の役員会において当事者である御本人達から学びたい内容の意見を出してもらった。



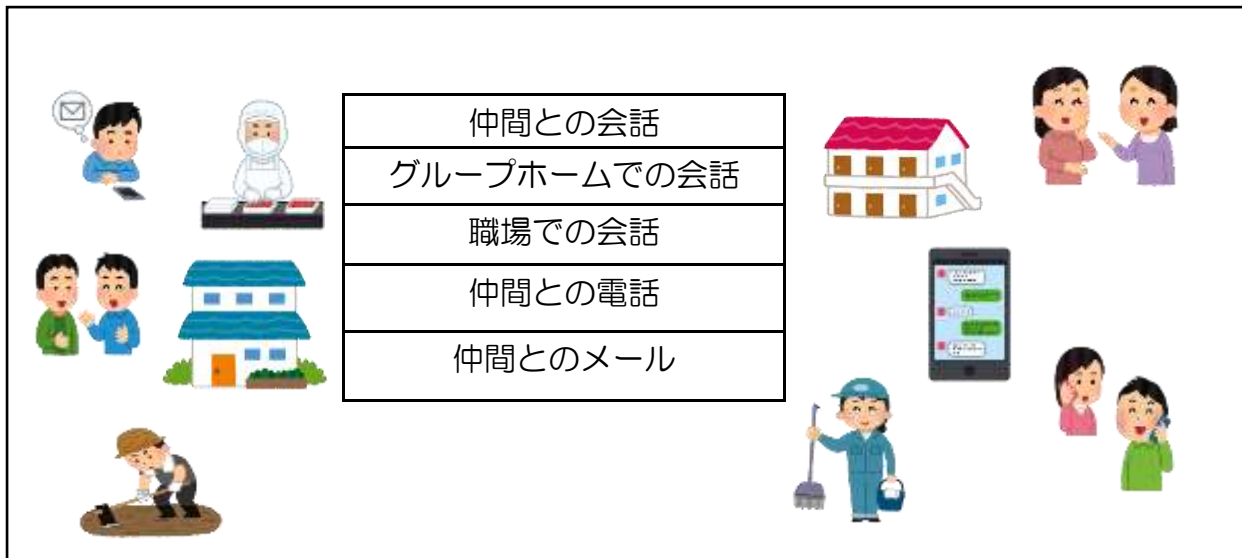
様々な意見が出た結果、「コミュニケーションについて」というテーマが採択された。さらに学習会テーマにふさわしい整理が必要であったため、後日会長と副会長で話を詰めた。



5つのテーマを決め、ご本人達の希望するテーマを選んで参加していただくことになった。

実際には希望するテーマが集中したため、異なるメンバー編成で同じテーマを2回実施するものもあった。

御本人たちが学びたいテーマに参加していただくことで、学びたいという気持ちを優先し学習意欲が沸くことを主体に講座設定した。



また学習会のルールを改めて作成し、講座の時に参加者の目に入るように掲示した。

がくしゅうかい
学習会のルール

- かんせんぼうし きよりのく てあら しょうどく ちゃくよう
 ・感染防止の協力。(手洗い、消毒、マスクの着用)
- はつげん ひと て あ
 ・発言がある人は手を挙げます。
- ほか ひと はつげん とき ひと はなし き
 ・他の人が発言している時は、その人の話を聞きます。
- はなし むづか とき
 ・話が難しかったり、よくわからない時は
- さんしよく あお き あか つか
 三色カード(青、黄、赤)を使います。
- いけん ひと
 ・意見は人それぞれです。
- せいかい まちが
 正解も間違いもありません。
- おも かんが はな
 思ったこと、考えたことを話します。

また学習会のテーマを考える話し合いの場で、自分たちの学びたいことを決めるだけでなく、「支援者にも話をきちんと聞いてほしい」「僕達だけじゃなく、支援者も勉強をしてほしい」「支援者も一緒に勉強することで自分たちのためになると思う」「支援者のそれぞれの持ち場に帰った時にも役に立つと思う」という私達支援者への要望もあがった。

【地域活動支援センターえみな（石狩）講座】

（地活プログラムに定期参加している主に知的障がい当事者向け）

《2年次 令和元年度の取り組み》

休日プログラム 2回実施

令和元年11月16日「危ない自転車の乗り方していいの？」（当事者2名、支援者2名）

令和元年12月14日「話し方とことばづかいについて」（当事者3名、支援者2名）

平日プログラム 1回実施

令和元年12月11日「話し方とことばづかいについて」（当事者3名、支援者2名）

講座は以下の流れで実施した。

- ①研究の主旨説明と研究同意
- ②ウォーミングアップ
- ③賢者・ワル、分かれ道、二つの家のイメージ確認
- ④テーマの確認
- ⑤個別に用紙記入
- ⑥賢者・ワルの発言確認
- ⑦発表
- ⑧まとめ

実施後の支援者側の感想として、期待されている回答や正解・不正解を気にされている様子を感じられた。またプリントの中に正答が隠れているのではないのか…と思ってか紙面を凝視することに時間を要し、自分の意見を書き出す（表現）することの難しさがみられた。翌回には反省点を考慮し事前のプリントは配布せず、言葉からイメージしてもらい次にイメージイラストを分類し、そこからイメージする言葉を自由に考えて発言してもらおうと自由発想からの言葉が増えた。



《3年次 令和元年度》

計画を予定したが、コロナ禍のため参加者の目途が立たず中止とした。



【地域活動支援センターアンナプルナの当事者向け講座】（札幌）

（当事者研究に関わる発達障がい当事者向け）

《1年次 平成30年度の取り組み》

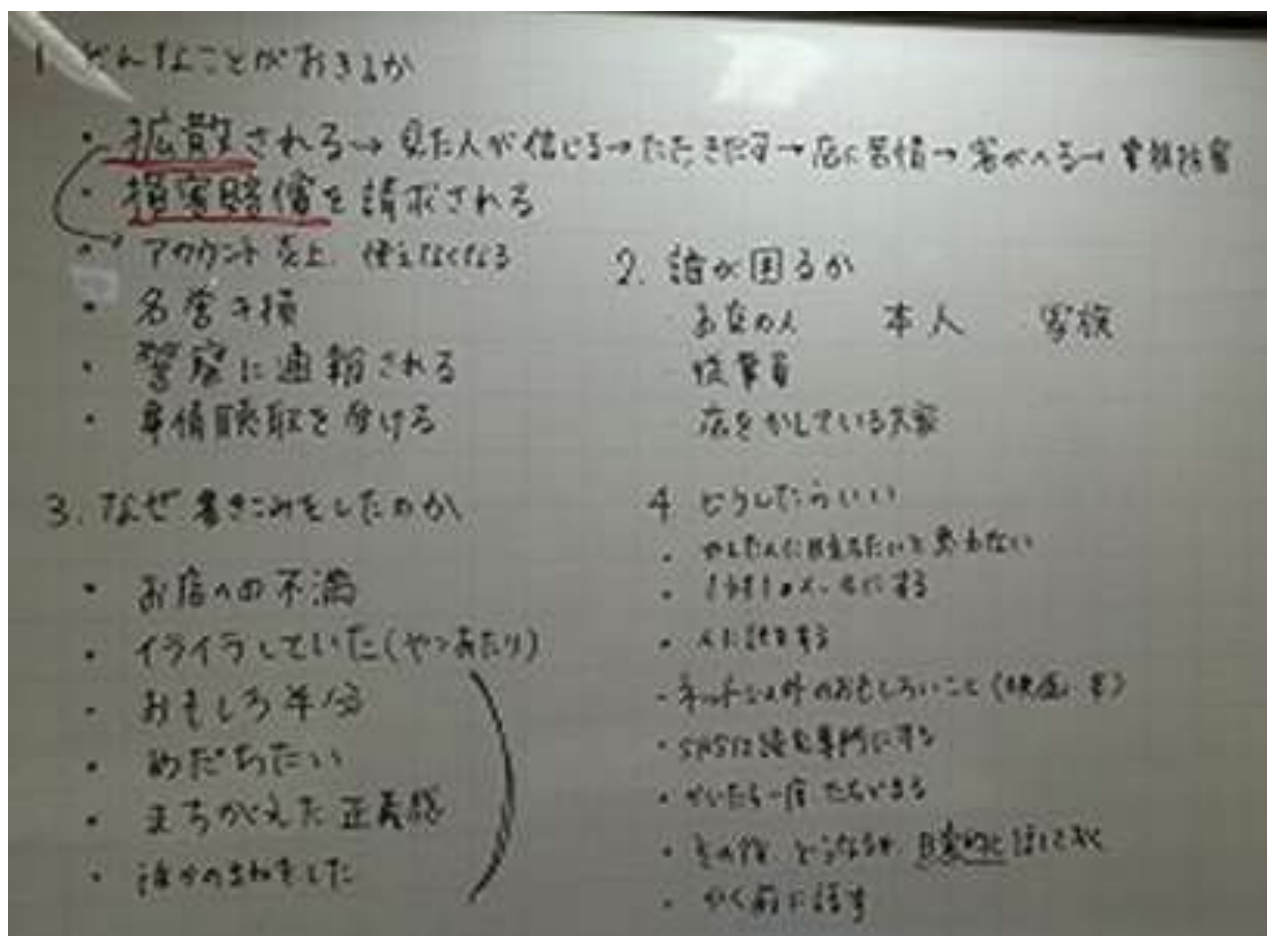
平成31年2月16日Panda-Jから派遣で、九州南高愛隣会の南口氏、東京都立青峰学園大沼氏を招いて当事者向け講座を開催した。（当事者3名）

「暮らしのルールブック」をベースにスマートフォンの使い方やSNSでのネットの書き込みの問題をテーマにした。ネットに書き込んだ時に



1. どうennaことがおきるか。
2. 誰が困るか。
3. なぜ書き込みをしたのか。
4. どうしたらいいか。

これら4つの点について、みんなで考え合った。



《2年次 令和元年度の取り組み》

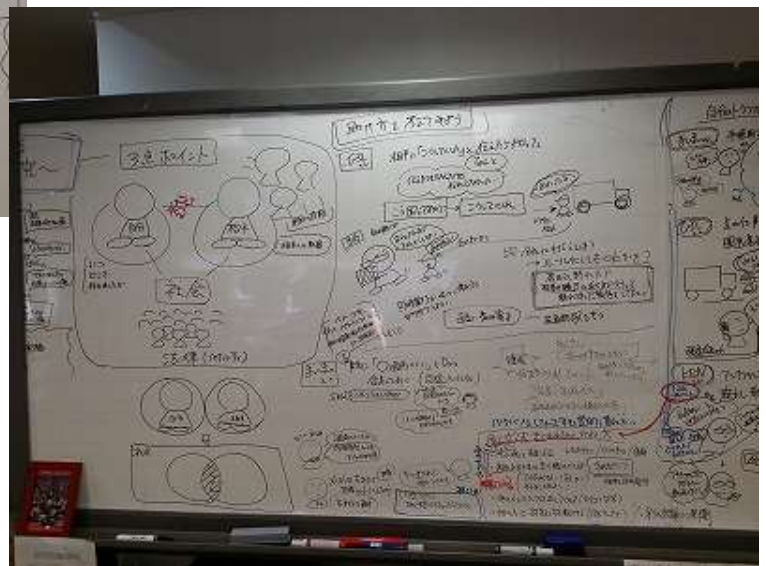
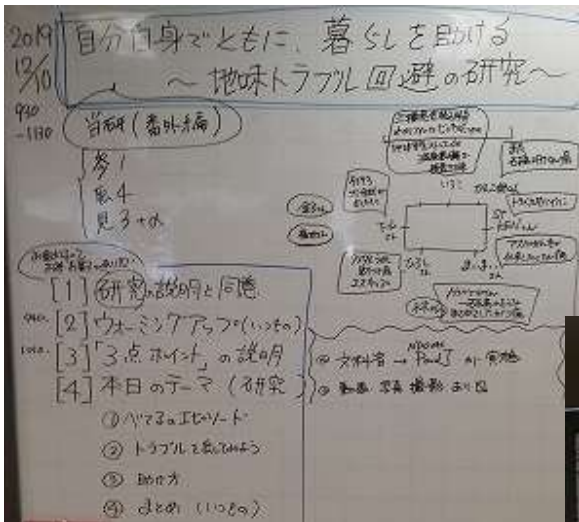
令和元年12月10日 当事者研究の番外編として講座を実施した。

講座は以下の流れで実施した。

- ①研究の主旨説明と研究同意
- ②ウォーミングアップ
- ③3点ポイントの確認（自分・相手・社会の視点から起こったトラブルを眺め見る）
- ④べてるの爆発のトラブルエピソードの紹介
- ⑤トラブルを出してみよう！
- ⑥自分の助け方、他者からの助け方の提案
- ⑦まとめ

当事者研究で問題を外在化することには参加者は慣れているものの、キープセーフプログラムで登場する「アバター」は、本講座の打ち合わせ段階からピアサポーターより馴染みのないものを取り入れる難しさについての意見があり、取り入れることを断念した。

講座終了後の会話から、「いつもと違う当事者研究だったので、どうなるかと思ったがおもしろかった」「実施前の準備の打ち合わせはストレスだったが、やってみたらおもしろかった」「どんなものかと思ったが、テーマ当研に似ていた（苦勞のテーマをあらかじめ設定した当事者研究）」「また（3点ポイントを取り入れた）当事者研究でやりたい」「社会や相手について「～かもしれない」と推測することは、被害的になることもあるが、行動を踏みとどまる助けにもなる」等の感想が聞かれた。



【これまでの3年間の取り組みを通して】

石狩 TS では当初、生涯学習の一環として当事者向けセルフアドボカシー講座の進め方について協議し、

1. どう定着・持続可能なものにしていくか
2. 講座内容のポイントやどんな講座にしていくか
3. キープセーフ+ α で進めていくこと
4. 当事者たちとの座談会で意見を聞いていく

これら4つを柱として進めてきた。

この3年間の取り組みを振り返ると、初年度はセルフアドボカシー講座を進める上で、「暮らしのルールブック」をベースに支援者研修の取り組みからスタートし、2年目には石狩大地の会向けの初回講座で、平井威氏（明治大学客員教授）によるセルフアドボカシー講座をKeep safeをベースに進められ、支援スタッフにとっても初めての実践を学ぶ絶好の機会となり、以後の講座展開につながっていった。キープセーフFC（フォーチェンジ）により、当事者が自分の問題と向き合い真っ当な生き方を選択するようになるために、

- ・当事者が自己効力感、自尊心を高められるようにすること=具体的称賛
- ・当事者の主体的考察、働きかけを引き出すこと=賢者の助言
- ・当事者が周囲から守られている実感が得られるようにする=信頼の人垣の形成

これらの視点が大切である。支援者がその視点に立ち、当事者が自ら問題を改善するための具体的スキルを身につけるために努力していく上で、「人からやらされることより、自らやることの育成」のための支援が必要である。その為には、支援者が当事者を主体して、意思尊重・意思決定支援を基本に、当事者が自ら意思表出できる環境づくりと分かれ道で自分を客観的に観れるようになるために一度立ち止まって考えることができるよう支援者が講座を通して引き出していくことの重要性をこれまでの取り組みから学ぶことができた。

これまでの講座取り組みでは、当事者が第三者として考えてみることや、それぞれの立場になって考えて自分の意見を出してもらった。迷った時には立ち止まって考えてから行動するということを意識するために、一方の考えだけでなく、第三者としてのアドバイスを考えることを学習した。しかし、内容が複雑であり、また初めて学習会に参加者には、架空のストーリーに乗ることができず、最後まで「難しかった」という感想の参加者もあり、支援者として猛省することになった学習会だった。そのため次回のテーマからの内容を検討するにあたり、その講座の中で、ルールを改めて作成し、講座の時に参加者の目に入るように掲示し、意思表出が難しい人を含め「わからない」ということで誰一人取り残されないために、個々に合わせた意思表出できるための様々な工夫をするなど、参加型のセルフアドボカシー講座の展開をしていくことにつながった。

また今年度は昨年度の学習会をベースにイラストは同じ物を使用することなどを予定していたが、参加される方の障がい特性を考慮し、イラストはシンプルにし着眼点が逸れないようなものを選び直し、学習会で使用した。

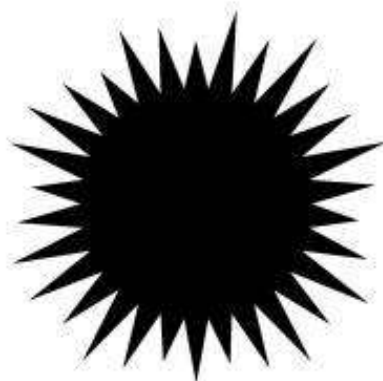
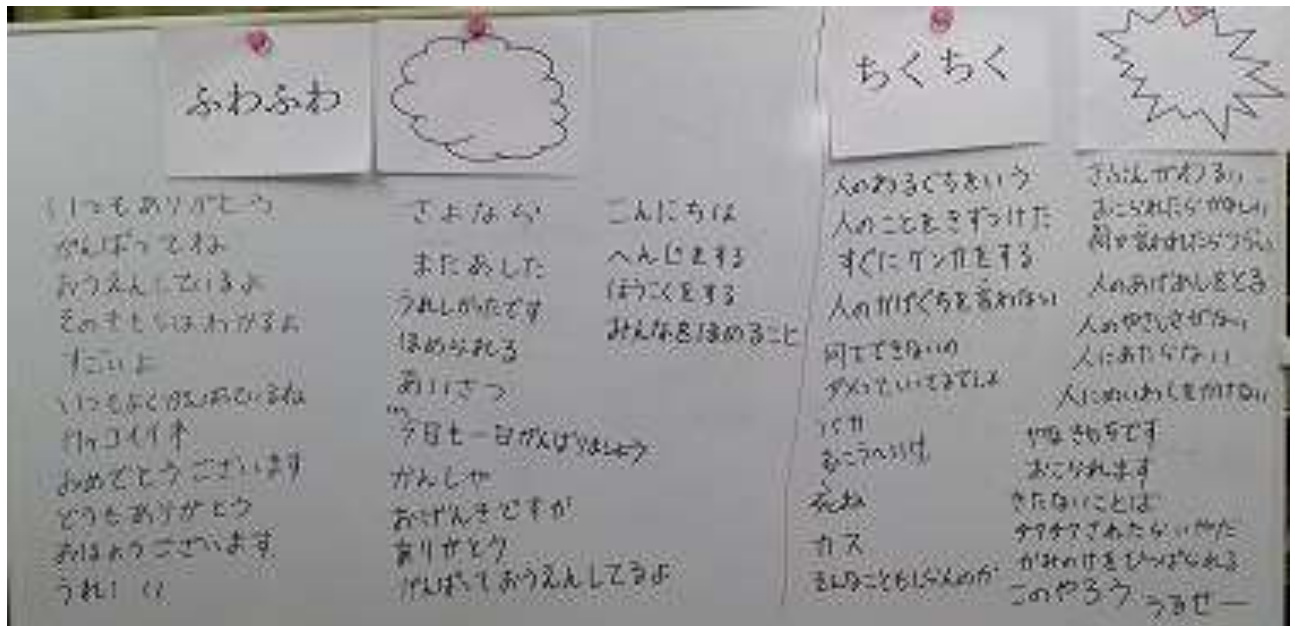
今後の課題として専門的な言葉を用いると当事者にとって言葉を理解しようとするこだわりに発展することがあり、講座の目的や内容から注意がそれてしまうことがあげられた。また、過去に叱られてきたことが多く、正解をしないといけないという強迫観念や、無から想像することの難しさなどが課題として見えてきた。

アンナプルナでは当事者研究で問題を外在化することには参加者は慣れているものの、キープセーフプログラムで登場する「アバター」は、本講座の打ち合わせ段階からピアサポーターより馴染みのないものを取り入れる難しさについて意見があり、取り入れること断念した。また、専門的な言葉を用いると、当事者にとって言葉を理解しようとするこだわりに発展することがあり、講座の目的や内容から注意がそれてしまうことがあった。

キープセーフ FC（フォーチェンジ）をベースにしたセルフアドボカシー講座の取り組みから、当事者と支援者は多くのことを学ぶことができた。当事者が主体的に学びたいテーマを考え、持続的な講座への取り組みができるように、支援者もネットワークを通じた研究を進め、今後、当事者と共に住み慣れた地域でのトラブル予防に向けた取り組みと自己実現に向けて継続したセルフアドボカシー講座の取り組みを進めていく。

【資料編】

「ふわふわことば」と「ちくちくことば」



講座案内チラシ

様

普段の生活の中で、家族や友達、近所の人やり一ひぶの人などと楽しく生活していくために、知っておいた方がいい「ルール」のおはなし（勉強会）を 11月16日（土）13時半～15時半『えみなてらす』で行います。

内容は「危あぶない自転車の乗り方じてんしゃのかたしていいの？ ～交通ルール編～」



12時にお父とうさんに送おくってきてもらってください。

えみなで「鶏肉とりにくともやしあまからの甘辛いたごま炒め」を一緒いっしょに食べましょう。

午後からは、『えみなてらす』で行う勉強会です。

お菓子かしを食べたりしながらお話しはなしをするので難しいことむずかはありません。正しいルールただを知しって素敵すてきな生活せいかつを送おくれるようになります。

では、16日えみなで待まってます。



アンケート用紙

しつもん 質問

- ① 気になるものに（○）をつけてください。
 ② 特に気になるものに順番をつけてください。

○ ×	順番	項目
		してはいけないこと。 「だまって入ってはいけない場所」 
		してはいけないこと。 「ネット犯罪」 
		気をつけたいこと。 「インターネットを使うときは気をつけよう」 
		気をつけたいこと。 「自分の情報は他の人に渡さない」 
		気をつけたいこと。 「自転車はルールを守って乗りましょう」 
		気をつけよう。 「人から誘われた時は気をつけよう」 
		気をつけよう。 「依存～やめられなくなることがあります～」 
		気をつけよう。 「危ない目にあったり、嫌な思いをしたりします」 

石狩トラブルシューターネットワーク会則

第1条 名称

各地でのTS（トラブルシューター）運動に学び、会の名称を石狩トラブルシューターネットワーク（略称 石狩TSネット）とする。

第2条 事務所

石狩TSネットの事務所を地域活動支援センターえみな（石狩市花川南8条3丁目71番地）に置く。

第3条 目的

障がい児・者が地域で生活する上で、様々な生きづらさがある。知的や自閉症の障がい児・者は物事を理解したり、表現することが苦手なために、街中では時おり「不審者」に間違えられたり、「犯罪者」にされたり、逆にトラブルに巻き込まれ、被害者になることもある。

障がいのある人たちが社会の中で安心して安全に暮らすためには、地域でのトラブルシューターネットワークづくりが必要である。

石狩TSネットは

1. どんな障がいがあっても、安心して地域でくらしたいけるわが街「いしかり」にしたい。
2. 障がいのある人のための権利擁護と地域でのトラブルシューターネットワークづくりの草の根運動を進めていく。

この2つの願いを実現させていくことを目的として活動していく。

第4条 活動

石狩TSネットは第3条の目的を実現する為に以下の活動を進めていく。

1. 包括的な支援基盤およびTS人材養成
2. 地域におけるトラブル予防 に向けた取り組み
3. 本人支援としての当事者向けセルフアドボカシー講座の実施と支援者養成

第5条 構成

個人、団体を問わず石狩TSネットの目的に賛同するすべての人を対象とし、石狩TSネット活動に参加する個人・団体によって構成される。

第6条 運営

1. 柔軟な組織としての会運営を基本とし、事務局的な運営を担う世話人会を置く。その構成は
世話人代表 1名
世話人 若干名

とする。さらに

会計監査 1名

を置く。

2. 世話人会の構成は個人・団体を問わない。

3. 世話人会は随時開催し、石狩T S ネット活動の課題整理・計画（企画）・活動組織・実施に向けた準備を行う。

4. 年に1度石狩T S ネットの活動を総括する集い(全体会)を開催し、活動の振り返りと次期活動計画を協議・確認する。又、世話人代表・世話人・会計監査の選出を行う。

第7条 会計

石狩T S ネット活動の会計、

1. 具体的な活動毎にワンコインサポーター協力金

2. 石狩T S ネット活動への賛助金

主にこれら2つを活動財源として運営する。

附則

この石狩T S ネット会則は2019年10月1日から施行する。

盛岡 TS における 3 年間の取り組み

長葎康紀 ◎岩手県発達障がい者支援センター

はじめに

盛岡トラブルシューターネットワーク（以下、盛岡 TS）は、平成 28 年度より実施してきたトラブルシューターの研修会実行委員会を母体とし、平成 30 年度より定期的な会合を設けて、障がい者による触法トラブルへの支援のネットワークづくりのために事例検討を中心とした勉強会を行うこととした。

集まりのきっかけは、手をつなぐ育成会会員の家族で、知的障がいのある方が警察で事情聴取を受けたことであった。その後、障がいのある方が触法トラブルに関わった場合の対応について学びたいという声があったことから、トラブルシューターの件首魁開催することとなった。

盛岡 TS メンバーは毎年少しずつ増えており、令和 2 年 12 月現在で 18 名であり、弁護士、大学教員、相談員、施設職員など多職種から集まっている。

1. 実施にいたる経緯

盛岡 TS のメンバーが所属する相談機関では、それぞれに触法行為を行った障

がい者への支援を行っていた。

平成 28 年度、29 年度に実施したトラブルシューターの研修会を通じて、ネットワークの必要性や定期的な学びの場が必要であると考え、触法ケースの事例検討を行っていく場として盛岡 TS として活動を開始した。活動の中で、同じような課題のあるケースに対し、それぞれの機関で対応している状況がわかった。

また、その中でも特に性問題行動に対しては、対応の困難さを多く感じていることもあげられた。

岩手県発達障がい者支援センターでは性的トラブルに関しては問題行動の 1 つとして、個別の相談の中で対応を行う程度であったが、近年は性的トラブルへの対応困難さを主訴としての相談が寄せられるようになってきた。特に中学生や高校生（特別支援学校中学部生・高等部生も含む）などの若年層に関する相談が多く寄せられている。多くの場合、問題行動をなくすことを目的とし、反省を促すことを期待しての依頼であると考えている。

岩手県では、知的障がい、発達障がいのある児童・生徒への性教育は体系的に行われていない。小学校の通常学級で行われる性教育の授業に参加する程度である。

知的障がい・発達障がいの児童・生徒による性的トラブルへの対応は、行動の制限（自宅謹慎や、校内謹慎など他者との接触を減らす）や、行動の振り返りを繰り返すことも多かった。その内容は障がい特性に合わせた内容ではなく、反省文を繰り返し書かせるだけの場合もあった。学校現場からもどのように指導をしてよいのか戸惑うとの声が発達障がい者支援センターへの依頼の中で聞かれている。

このような、「障がいがある」、「性の問題」という両面から対応に対して尻込みしてしまいます状況に対して、有効な支援方法を模索していた中で、Keep Safeの存在を知り、盛岡TSによる活動として実施に向けた検討を行うこととした。

2. 平成30年度の取り組み

平成30年11月10日に行われた「文部科学省実践研究事業 ～ 障害者の多様な学習活動を総合的に支援するため実践研究」第一回コア会議に2名が参加し、全国のTSの活動状況と、Keep Safeプログラムについて学んだ。その中で、各地でどのような展開が可能なのかを検討することとなった。

第1回コア会議を受けて、盛岡TSのコアメンバー内で、Keep Safe実施の必要性、実施に向けた課題を検討した。

複数の相談機関の中で性的なトラブルに関わった方の支援をしていること、具体的に効果的な支援が行われていないことなどがあげられ、Keep Safeの実践を行うこととなった。実践に向けた課題としては、盛岡TSのメンバーだけではスタッフ

が不足することから、Keep Safeの啓発と協力者募集を目的とした研修会を開催することとした。

平成31年1月10日に盛岡TSの会合を行い、研修会の日程と内容を検討し、2月23日に基礎講習会を開催した。

基礎研修会には21名が参加し、TSについて、Keep Safeについてをグループワークを交えて学んだ。実施後のアンケートで6名が協力が可能と回答した。

3. 平成31年（令和元年）度の取り組み

盛岡TSのメンバーと、協力者を対象に4月13日、14日、5月26日の計3日間、インストラクター研修を行った。モジュール1、2のマニュアルの読み合わせや演習を行い、プログラムへの具体的なイメージ作りを行った。

その間に盛岡TSの会合を行い、実施の日程、参加者の選定を行った。

実施に当たり、中心となるスタッフを発達障がい者支援センター、基幹相談支援センター、地域生活定着支援センターのスタッフ4名とし、メインファシリテーターを務めることとした。

スタッフの確保、日程の調整を行った結果、7月から3月までの9か月間で、2週間に1回（本人セッション計18回、保護者セッション計9回）の開催とした。

参加者は中心スタッフの所属先である地域生活定着支援センター、基幹相談支援事業所、発達障がい者支援センターから1名ずつ選ぶこととした。

参加者の概要は15歳から20歳までの

男性3名である。IQは50台～80台で、診断名は「ADHD」、「ASD、ADHD、愛着障がい、知的障がい」、「知的障がい」であった。

中学校、就労移行支援事業所に通っており、自宅やグループホームから通っていた。

それぞれに女性への抱き着きや身体接触、強制わいせつ等のトラブルがあり、1名は少年院への入所経験があった。

6月22日に参加者及び家族との同意書の取り交わしとARMIDILO-Sを用いたアセスメントを実施した。

7月2日の盛岡TSの会合で最終的な確認を行い、7月12日から第1回の取り組みを開始した。

4. Keep Safeの実践

NPO法人PandA-Jからスーパーバイズを受けながら実施した。

スタッフは各回5～9名の参加であった。

各回ごとにセッションの展開案を作成し、事前にスタッフに配布した。

実践の流れは①展開案の作成、②教材の作成、③事前打ち合わせ（当日）、④実践、⑤振り返り（当日）である。

当日の動きは、9時にスタッフが集合し、会場準備をした後に当日の流れの打ち合わせを行い、10時からセッションを開始し、休憩をはさんで12時まで行った。終了後は片付けを行った後に振り返りを行った。

実践開始当初は参加者の表情も硬く、参加の時にマスクやサングラスで顔を隠す参加者もいた。

実践が進むにつれ、参加者間で互いを気遣う様子や、笑顔でスタッフと話す様子が見られた。

実践期間中、女性への抱き着きや、公共の場での性器いじりなどの行動が確認された。その都度、スタッフで情報を共有し、対応を検討したうえで、実践の中で行動に関する整理も行えるように工夫した。

実践を進めていく中で、それまでは支援者との関係が築きにくかった参加者が、自分の行動の報告をするようになったり、不適切と思われる行動に関しての反省をしたりする様子も出てきた。

また、自分に関する性的な話題に触れることに対して強い抵抗が見られた参加者が、プログラムの後半になり、自分が過去に行った性的トラブルに関し、当時の指導を受ける中で感じていた悔しさを話す場面も見られた。

最終回では終了証を受け取れてよかった、これからも集まる機会が欲しいとの声があり、フォローアップの集まりを行うことを約束して終了した。

5. 令和2年度の取り組み

令和元年度のKeep Safe参加者を対象としたフォローアップを行うこととした。フォローアップは5月9日、10月17日に実施した。内容は事前に支援者から近況を確認し、その中で見られた課題について、グッドライブモデルで考えるものとしている。また、参加者の中で仲間意識も育っていることから、気持ちを話せる場所としても効果が期待できる。

また、令和元年度の取り組みを受けて、

今後もプログラムを受けさせたい方が多くいること、性的なトラブル以外の課題の方もいること、短い期間で実践できる内容が良いことなどの意見が出ており、キープセーフFCの実施を行うこととした。

令和2年7月9日に盛岡TSの会合を開き、Keep Safeに協力いただいた方や、メンバーと仕事上のつながりがあり、TSの活動に興味を持つ方にも声をかけ、メンバーを増やすこととした。

キープセーフFCの実践は11月から2月末までで5回行い、性的な内容以外にも窃盗なども含めることとした。

メンバーは16歳から22歳までの男性3名で、生活場所はグループホーム、入所施設、在宅である。性的なトラブルがある方が2名、窃盗がある方が1名であった。診断名は自閉スペクトラム症が2名、知的障がい1名（発達障がい者支援センターとしての見立ては自閉スペクトラム症の傾向あり）である。

6. キープセーフFCの実践

実践の流れ、当日の動きは令和元年度のKeep Safeと同じにした。

11月21日から2週間に1度行っている。

内容はKeep Safeで行うものをベースとし、グッドライブモデルを用いて、行動に関してグッドサイド・バッドサイドで考えていく方法を練習している。

胃ろうのため発語が不明瞭な方、環境や人の変化が苦手、慣れるまでコミュニケーションがとりにくい方もいるため、

筆談や代筆などを行いながら、自分の考えを伝えられることを意識しながら行っている。

キープセーフFCの実践で確認された様子から、普段の支援を行うグループホームや入所施設の職員へ対応の助言も行い、生活場面でもフォローをしてもらうことにより、回数の少なさを補うようにしている。

7. おわりに

3年間の活動を通じて、緩やかなつながりであった盛岡TSという組織が、目的を持ち、メンバーが増え、活動の幅を広げることができた。

Keep Safeの実践を通じて、支援について意見を交わす機会もあり、メンバーのスキルアップの機会にもなった。

Keep Safeの参加者も自分の気持ちを表現できるようになったり、支援者との関係が深まったり、フォローアップの活動を楽しみにしている話を聞いたりする。過去の失敗体験から新たなステージを目指していくための一助になっていると感じている。

今後も盛岡TSとして、地域を巻き込んだ活動を展開していき、トラブルに関わった障がいのある方々への学びの機会と、安心できる環境づくりを考えていきたい。

令和2年度 多摩トラブルシューターネットワーク報告書

小川晴美・福田和弘・石原久子・平井 威・奥田 真・大沼健司・阿部幸江
穂積 弘・遠 直美・鈴木七重・春口明朗

セルフアドボカシー支援の実践は、平成31年2月から支援者や家族向けのセミナーからスタートした。当事者の主体的な参加をイメージできるようにゼミナールと称し、第1回は令和1年5月9日当初は、社会福祉法人南高愛隣会作成の「暮らしのルールブック」を用いて進めながら、単に「これをしてはダメ」と教える講座にならず、当事者が「自分が楽しく生きていくために守ること」に気づき、それを守るためのスキルを身につけ、進んで実践し、信頼できる人に必要な援助を求めることができるように、ルールブック以外の教材やキープセーフ for チェンジにつながるセッションになっていった。

なお、当事者向けのゼミナールの会場は、場所に慣れていくことが重要であること、通いやすいことなど配慮して、国立市にある就労継続支援B型事業所 天成舎に統一した。

I. 令和1年度の実践概要

*暮らしのルールブックを使用したセッションの実際

開催日：平成31年2月9日 会場：TK立川ビル

講師：南口英美・松友 大氏（南高愛隣会）

対象者：教育・福祉等支援スタッフ・家族

テーマ：・性問題行動のある知的障害者・発達障害の青少年や成人、保護者に向けた修復的グループ学習プログラムを実践するための準備及びリサーチ。

*第1回目ゼミナール

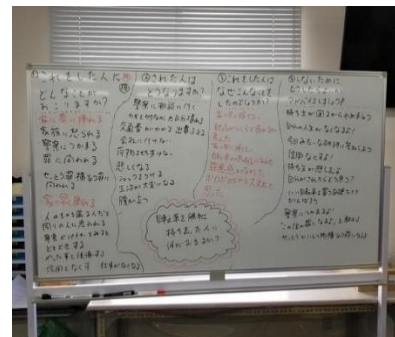
開催日：令和元年 5月19日（日）

テーマ：「自分のものではない自転車を持ってきたら、
何が起きるでしょう」

ファシリテーター 平井 威（明星大学客員教授）

*第2回 暮らしのルールブックを使用した セルフアドボカシー育成講座

開催日 令和元年 9月 7日（土）



テーマ：「適切な距離を置いたSNSとの付き合い方について」

ファシリテーター：大沼 健司（東京都立青峰学園主幹教諭）



*第3回セルフアドボカシー養成講座

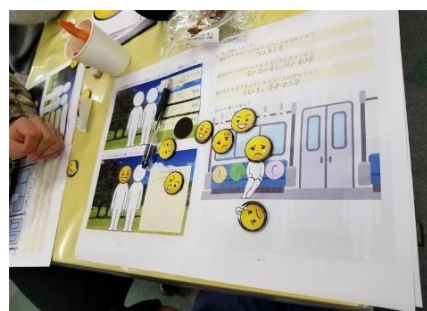
開催日 令和元年10月12日（土）

テーマ：「距離 パーソナルスペース」

暮らしのルールブックを使用しないオリジナルのテーマと教材にした。

ファシリテーター：福田和弘（青梅福祉作業所 施設長）

当事者のみテーブルを用意して、ロールプレイをしやすいようにペアで組むことを配慮した席にした。また、2名に1名のアシスタントを配置して、家族や支援スタッフなどは当事者後方に座ってもらい、適宜参加できるようにした。



*第4回キープセーフ for チェンジ導入講座

開催日 令和2年1月25日（土）

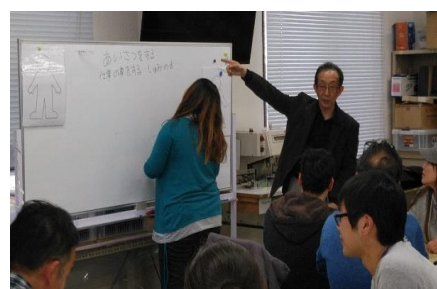
テーマ：「恋愛」

*「ふれあいの段階と合意」を学び、恋愛力をつけよう！

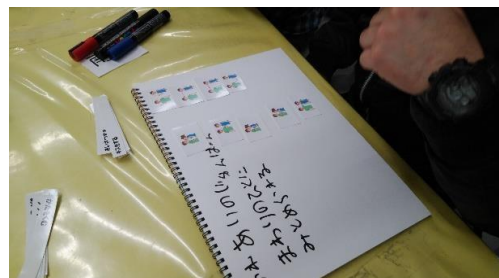
*「グッドウエイ・モデル」を知る

ファシリテーター：平井 威（明星大学客員教授）

令和2年度の活動テーマを当事者のみなさんに聞いたところ、ほぼ全員が「恋愛に関すること」を希望していたため、キープセーフ for チェンジの進め方を採用した。



※ なお、3月7日に第5回目の講座を計画していたが、新型コロナの感染拡大がはじまってきたので、中止して、令和2年度は正式にキープセーフ for チェンジを実施していくことになった。



Ⅱ. 令和2年度の実践報告

小川晴美・福田和弘・石原久子・平井 威・奥田 真・大沼健司・阿部幸江
穂積 弘・達 直美・鈴木七重・春口明朗

セルフアドボカシー支援に向けた キープセーフforチェンジ フォー

当初の計画では、奇数月に計6回の講座をする予定だったが、5月まで新型コロナの緊急事態宣言があり、さらに感染拡大が予想される秋以降を避けるように、解除後の7月からほぼ2週間ごとに計5回の講座を行った。

1. 全体セッションテーマ「交際」

交際の場面でのトラブルを考える。「どうして近すぎてはいけないか」「遊びと一緒に行くときに、相手が嫌がったりしていないか」「付き合い方の段階はどうか」「どう選択するか?」「だからグッドウェイはこちらだね」など、自分の人生の岐路でどういう選択をすると人生が豊かになるかを学習する。

2. 第1回セッション

日時：2020年7月18日（土）14:00～16:00

参加者：3事業所6名の参加者だった。1月25日のセッション時には6事業所12名の参加があったが、新型コロナの感染予防等の観点から参加者は半分となった。また、支援者等の参加も極力なくして、全体人数を減らした。

担当：MFT 福田

SFT 阿部・石原・大沼・小川・鈴木・達・春口・平井・穂積

(1)セッションの目的

- * ウイズコロナにおいて自分で考えて行動していくことに気づく
- * 前回までのふりかえりをして、セッションのルールなどを確認していく

※感染予防策

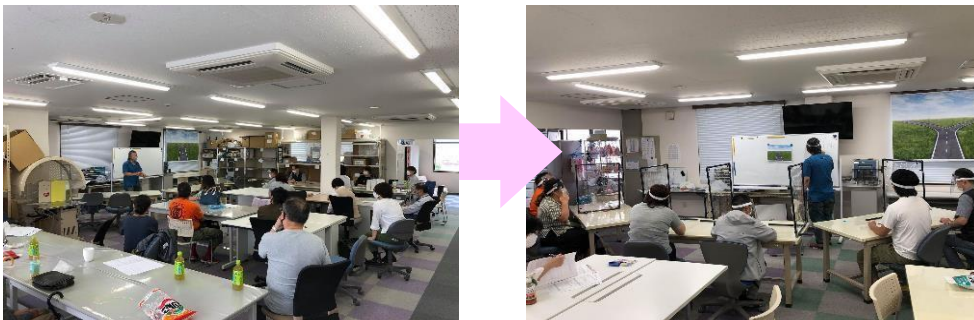
- * ウイズコロナセッションで座り方などを工夫するが最初はソーシャルディスタンスを優先し、一人一人が離れて座るレイアウトにする。
- * 参加者には事前に検温をお願いし、会場は上履きを用意してもらい履き替えてもらった。
- * 当日のセッション前半のポイントである感染予防を自分たちで考えて実践するということをした。

(2)感染予防ワーク

離れていると参加しづらい雰囲気共有し、近くに座って大丈夫な方法を確認しあい、その準備をして、今までと同じような座り方にしていく。

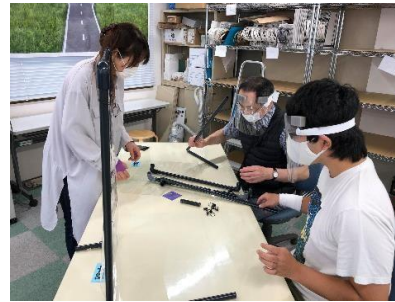
約6か月ぶりの再会だったので、前回までに作られていた雰囲気に近づけることが大きな目的となった。

2月ごろから今日までの新型コロナ感染予防下の生活等を振り返り、参加者それぞれの困ったこと、工夫したことなどを出し合った。



当初、離れ離れの席で進行したが、以前のような距離感で進行していけるような工夫を出し合って、フェイスシールドと仕切板の提案が出た。

テレビのバラエティー番組などで出演者やスタジオでの工夫については、ほとんどの方が認識していた。



組み立てキットを使って、仕切り版とフェイスシールドを作るというワークをした。

休憩(15分)15:00~15:15

飲み物やお菓子は、いつもとは違い、一人一人の個包にして、自由時間のソーシャルディスタンスを自ら考えて行動するように声掛けした。

当日初めての参加の当事者が1名いたが、ワークが入ったこともあり、休憩時には緊張がほぐれている様子だった。



(3)前回の振り返りとツールの確認

前回どのようなテーマだったかという問いについては、参加経験者はほぼ答えられていた。今回は次回からのセッションに向けたウォーミングアップという目的もあり、これまで使っていて、今後も使う頻度の高いツールについて、その意味することなどを復習していくことと、印象に残していくことを重点化した。

教材 1	ふれあいの合意ルール	教材 6	ストップボタン
教材 2	赤信号・青信号	教材 7	3人の賢者と悪者のカード
教材 3	グッドウェイモデルイラスト	教材 8	バッド/グッドハウスのイラスト
教材 4	グッドサイド/バッドサイドのイラスト	教材 9	グッドライフモデル図
		教材 10	分かれ道の風景 大判図
教材 5	分かれ道に立つ男イラスト	教材 11	3人の賢者と悪者の吹き出しシート

分かれ道の風景教材は、縦 118 cm×横 168 cmの大判の物を作成し、常に前面に掲げておくようにした。

画像教材は、パワーポイントでプロジェクトに映した画像を全てなくして、紙ベースにして、パウチ加工をして毎回使えるように準備した。



右図については、参加者それぞれの中にある悪いところや良いところを出し合い、「悪いことをしてしまうときに私の中に別の人がいる」などの意見も出た。画像素材の思い起こしを主としていたので、ひとつひとつを深めるのは次回からとした。

「分かれ道に立つ男」の図柄については、立っている男の人はどのような気持ちかという問いに対して、どっちに行くか迷っているという発言が多かった。

グッドハウスとバッドハウスの場面では、バッドという言葉の意味を知らない参加者が予想よりも多かったことが印象的だった。日本語の良い家と悪い家との比較では、グッド／バッドハウスの方が良いという反応があったので、多摩のセッションではグッド／バッドとっていくことになった。



三人の賢者と三人の悪者のキャラクター

は当事者の心の中を図式化していく上で重要なので、その性格を確認していった。

英国の当事者作の画像の方が日本アニメ風の画像よりも印象に残っていくので、多摩ではこの絵を使っていくことになった。ただし、名前は覚えにくく性格とのつながりが持ちにくそうであった。

(4) 画像ツールを使ったMFTによるロールプレイ

「マスクを自動車においてきてしまった人(F T)が、コンビニに入ろうとしていて、マスクを取りに戻るか、マスクをしないでコンビニに入るかどうか」という場面を再現して、3人の賢者／悪者の言葉を参加者にそれぞれ言ってもらった。また、各自の卓上に

ストップボタンの図柄を置いて、マスクをしないで行こうとするF Tの動きに対してストップボタンを押すアクションをしてもらい止めてもらった。

(5) 評価

評価規準A（当事者に身に着けてもらいたいこと）

①自分の行動を変えるための主体的な学び方を体験する。

1月までのセッションの積み重ねを感じた。参加するという姿勢については主体性を感じたし、初めて参加した人もそうした雰囲気にならに溶け込んでいた。

②共に学ぶ仲間を形成し、FT・支援者との信頼関係を築く。

導入ときさまざまな教材の確認という内容であったために、ややショータイム的な状況になってしまい、MFTの発言が多くなってしまった。個別ワークで書き込む展開がなかったので発言が苦手な参加者が後半うつむきがちになってしまった。

③豊かに生きるための指針（グッドウエイ）を知り、問題行動のリスクを軽減する。

マスクを素材としたMFTのロールプレイでは、三人の悪者と賢者の声もどんどん出てきて、マスクをしないで人ごみに入るという行為の結果とその反対の事については、理解しやすかったようだ。

評価基準B（このセッションでのMFTの振る舞いをみるポイント）

①当事者が自己効力感、自尊心を高められるような具体的称賛ができたか？

テンポが速い展開であったことや教材が次々と提示されていく内容だったので、やや、一方向的な展開になってしまった。

②当事者の主体的考察、働きかけを引き出すこと（賢者の助言など）ができたか？

参加者が全員複数回発言し、中には自分の負の面などをチキンと口に出している人もいて、参加度は良かったが、それぞれの発言を再度落とし込んでいくまでは至らなかった。

③当事者が周囲から守られている実感が得られるような共感的まなざしとルール、約束の確認、F Tからの実現可能な要求の提出と応答ができたか？

前回1月25日までに出来上がっていた雰囲気を早い段階で取り戻していた。マスクのロールプレイとストップボタンは身近なモチーフでわかりやすかったと思う。

多摩TSセルフアドボカシー講座「 7月18日 」 展開例	
日時:	2020年7月18日 (土) 14:00 ~ 20:00
場所:	天成舎
担当:	MFT 福田 SFT 阿部 石原 大沼 小川 奥田 鈴木 遠 春口 平井 穂積

1. セッションの目的

(1) ウイズコロナにおいて自分で考えて行動していくことに気づく
(2) 前回までのふりかえりをして、セッションのルールなどを確認していく
※ ウイズコロナセッションで座り方などを工夫するが最初はソーシャルディスタンスを優先し、一人一人が離れて座るレイアウトにする。
離れていると参加しづらい雰囲気を共有し、近くに座って大丈夫な方法を確認しあい、その準備をして、今までと同じような座り方をしていく。

時間配分	テーマ (当事者の活動とMFの発問等)	留意点 (SFTの活動、教材・教具、留意すること等)
展開 1	コロナ第1波をふりかえる	
展開 1-1 (5分) 14:05	いろいろな出来事を出し合う セッションができなかった理由を伝える。	ひさしぶりのセッションなので、1月段階で出来上がってきた雰囲気を取り戻していけるように発言を促していく。
	2月頃・3月頃・4月頃・緊急事態宣言・ステイホームなどのキーワードが当事者から出てくるように促していく。	当事者の発言をホワイトボードに書き込んでいく
展開 1-2 (5分) 14:10	困った事や工夫したこと 困った事や失敗してしまったことを聞く。 ★どうしていろいろな制限があるのかについてはFCが解説する。(池上彰風?) 工夫したこと、よくやれたと思う事を聞く。 グッド/バッドハウスのイラストを提示して振り分けていく。	1) 自分だけの困った事だけでなく、自分以外の人の困っている事も聞き出す ※現実を十分に消化しきれていない当事者がいるので解説する。 2) 気を付けていること、ステイホームでうまくやれていることなどを出し合う
展開 1-3 (2分) 14:12	離れて座っていることの不都合さを感じる ここまで、当事者などが離れて座っていてFCも遠いという状況が続いていくか、先ほど出ていた工夫をしてみるか聞く。	1) 離れすぎでいて、見づらいか、声が届きにくいなどの問題点を共感、共有する。

展開 2	ウィズコロナ自分たちのできることを さまざまな場面で工夫されていることを出し合う ずっと家にいられないよね 再開することはなかなか 工夫しているなど感じるものは?	1) 野球の再開・テニ 飲食店の工夫・合 合っていく。リ てくると思うの いくが、自分た していく。
------	---	---

展開 2-2 (5分) 14:20	このセッションで活用できる工夫を考え 今、自分たちがすぐにできる工夫を選んでみる	1) 上げられた工夫の中でこのセッションで使えることを選び出す 2) ホワイトボードの羅列の中から選択していく
展開 3 (10分) 14:30	フェイスシールドを作成する 【ワーク1】 フェイスシールドキットを渡してつくってみる 【ワーク2】 仕切り版を作ってみる	1) キットは簡単な構造なのですぐに作れる。SFTが一人一人に付いて、完成させる。スタッフも自分の物を作る。仕切りは、ほぼSFTが作ってしまっ 構わない。一緒に...程度でよい。
休憩 (15分) 14:40 14:55	お菓子などを用意してリラックスできるようにする。 自由時間のソーシャルディスタンスを自ら考えて行動するように声掛けする。	SFTはグループメンバーの打ち明け具合や関係性を観察する 飲み物やお菓子は、いつもとは違い、一人一人の個性にする。
展開 4 (10分) 15:05	前回のふりかえり ふれあいの段階 半年間の空白があるので、FCが教材を提示していき、その教材で思い出したことを聞き出す。出ないときはFCが言っていく。 関係段階カード ふれあいと5つの間柄の図	全体的にあっさり進めていき一つ一つに時間をかけないようにする。 教材1 関係段階カード 教材2 ふれあいの段階イラスト
展開 4-2 (10分)	ふれあいの含意 4つの含意ルール どんな意味かを聞く	教材3 ふれあいの含意ルール 教材4 赤信号・青信号
展開 5 (10分)	グッドウェイモデル グッドウェイモデルのイラストと考え方を知る。 前回使ったツールの思い出しをする。イラストの意味がどうだったかを聞き出し いく。	教材5 グッドウェイモデルイラスト 人の行動の「よい面」や「悪い面」の原因となる「思考」「考え」「欲望」「信念」「価値観」について触れる。 小気味よく進行して印象に残るようにする。
展開 5-2 (10分)	グッドサイド/バッドサイドとそれぞれの住人 思い出しが中心となるが、大事なツールなので当事者の発言を多くするようにする。 イラストのもつ意味を聞く。	教材6 グッドサイド/バッドサイドのイラスト 人は、自分の「良い面」の声、「悪い面」の声のどちらを聴くかを自分で選択できることを強調
展開 5-3 (10分)	分かれ道に立つ男 イラストを思い出さず。 分かれ道に立つ男という名称を確認する。	教材7 分かれ道に立つ男イラスト 分かれ道という概念をある程度共有できれば良いと考える。 どっちに何がというハテナを作っておきたい。

展開 5-4	「分かれ道スキル」を知る 赤信号・青信号の方ードを使い、立ち止まるということの思い起こす。	心の停止ボタン、そのあとどうなる、ストップ・ステップの3つのスキルを説明する。
展開 6	グッドウェイモデル(マスク着用というシチュエーション)	
展開 6-1 (10分) 15:35	他者が複数いる場所でマスクをする・しないという前半部分の流れを使って簡単に分かれ道を使ってみる。 * ロールプレイ形式をどるが時間の関係上FCが動き、その動き方に当事者がストップをかけたか、誘導していきような流れにする。時間があれば何人か当事者に立ってもらおう。 ・ 悪人のキャラを説明する。 ・ 悪人のキャラ別さざやきを考えてみる。 ・ その声でパッドへ行こうとするFT ・ それを赤信号で止めてもらう ・ 賢人のキャラを説明する。 ・ キャラ別のさざやきを考えてみる。 ・ ストップしているFTに対して呼びかけてもらう。	教材8 3人の賢者と悪人のカード 次回からのセッションに必要な教材を思い起こすことを主とするが、グッドウェイはロールプレイ的な場面を使って、アクティブにイメージを共有できるようにする。 賢者と悪人のキャラについてもある程度実感できるようにしたい。 FTの動きに声かける形で行う。 今後の要の一つなので時間があるかぎりしっかりやる。
展開 6-2 (10分) 15:45	パッドハウスとグッドハウスのイメージを語り合う。 ・ 分かれ道の先にあるものは何かのイメージを出し合う。 ・ グッドハウスではどんな生活があるかな？	教材8 パッド/グッドハウスのイラスト 今後各自が各自のイメージを膨らませていくことが大切なので、今回は、サラッと出し合う程度で、余韻が残った方がよいと考える。 グッドハウスのイメージを多く出し合うことに留意する。
展開 7	振り返り	
展開 7-1 (10分) 15:55	本日のセッションを振り返る ・ 何がよかったですが、何が分かりましたか？ ・ 何が嫌でしたが、何が難しかったですか？ ・ 次回もっとよくすべきことはありますか？ 恋愛という言葉を実際という言葉に拡大していくことを説明する。	当事者の皆さんがどの程度理解したか必ず確認する。 理解が浅かったところをチェックし、次回以降に反映させる。 昨年12月から1月にかけて当事者の皆さんの希望を取り入れて決めてきたので、そのことに触れながら「実際」という言葉に置き換えていく。
CA	チル・アクティビティ (クールダウン)	
15:55	全身の筋肉のリラクゼーション ジニャルデイスダンスで広がり、立ち位置を決めていく。	メンバーの要望やイメージも変えても良いし同じが良い。 ※ 深呼吸スキルは使わないこととする。
16:00	終了	

セッション終了後に以下の基準で振り返り評価をする。
評価規準A (当事者に身に着けてもらいたいこと)
(1) 自分の行動を変えるための主体的な学び方を体験する。
(2) 共に学ぶ仲間を形成し、FT・支援者との信頼関係を築く。
(3) 豊かに生きるための指針(グッドウェイ)を知り、問題行動のリスクを軽減する。
評価規準B (このセッションでのFTの振る舞いをみるポイント)
(1) 当事者が自己効力感、自尊心高められるような具体的称賛ができたか？
(2) 当事者の主体的考察、働きかけを引き出すこと(賢者の助言など)ができたか？
(3) 当事者が周囲から守られている実感が得られるような共感的眼差とルール、約束の確認、FTからの実現可能な要求の提出と応答ができたか？

3. 第2回セッション

日時：2020年8月1日（土）14:00～16:00

担当：MFT 大沼・達

SFT 阿部 石原 小川 奥田 鈴木 春口 平井 福田 穂積

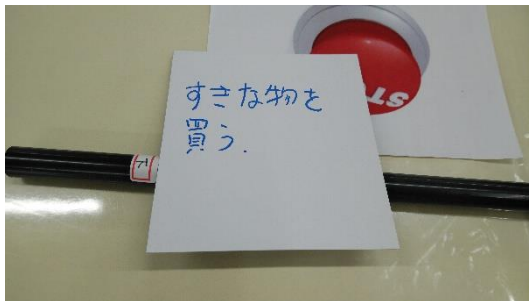
(1)セッションの目的

- ① 自分の行動を変えるために主体的な学び方を体験する。
- ② 共に学ぶ仲間を形成し、FT・支援者との信頼関係を築く。
- ③ 豊かに生きるための指針を知り、問題行動のリスクを軽減する。

(2)ねらい

- ①「暮らしの中の自己選択・自己決定 自分で決める」
- ②交際の時の分かれ道を共感する

(3)チル・アクティビティカードの作成



前回のセッションでストップボタンにとっても反応が良かったことを受けて、怒りや悲しみなどの感情が芽生えた時の道具＝クールアイテムを当事者がそれぞれ自分を振り返りながら作った。今後のセッションで使い続けられるように大き目なカード(ボール紙)に「背伸びをする。」

「遠くを見る」「本を読む」「好きなDVDを観る」などが書き込まれていった。

(4)交際場面での分かれ道・共感

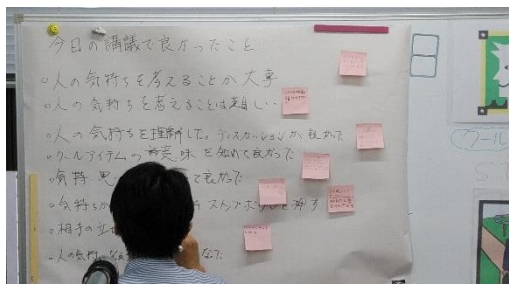


MFTが「映画館に行くことになっていたデートで、相手が感染予防のために映画を観るのをやめたいと言ってきたとき」の場面を演じて、どのような感情が出てくるかをみんなで意見を出し合った。

「悲しい」「頭にきた」などの意見が出されて、その時に前半で作ったクールアイテムを使ってみるという流れを作った。

2つ目の場面は、食事に行くという設定で、食べたいものが相手と違ったときの感情とクールアイテムの使用をおこなった。

普段の生活の中でさまざまな分かれ道を見出していき、そのとき、自分はどのように行動していくかという事を2つのMFTたちによるロールプレイ(ストーリー)でふかめていき、当事者の皆さんが普段の生活の中で体験するような場面だったので、皆さんの



いろいろな意見が出ていた。

テーマが昨年度に皆さんが強く希望した「恋愛」から、実際→「付き合い方」にしたため、MFTのロールプレイを興味強く見ていたのが印象的だった。

(5) キープセーフ for チェンジの可能性と留意するところ

いろいろなアプローチの仕方を設定していけるという可能性を探求していくことが多摩TSのセッションのもう一つの目的だった。今回の絵やプロジェクトの画像ではないMFTによるロールプレイという実写版のストーリーは当事者の反応をよく導いていた。

しかし、キープセーフのコアポイントである「当事者の思考や認知の流れ」、「自動思考の形成」という視点に立つと、ストーリーに含まれるさまざまな情報が邪魔をしてしまい、当事者の思考の流れが混乱してしまったことがあった。

また、「分かれ道課題」といっても、2つのうち選択肢があればなんでも良いということではなく、セッションの中に盛り込むべき課題をより精査する必要があった。

3人の賢者と悪者がみんなの内面にあり、そのことを受け止めながらも、どれを自分自信で選択していくかということに落とし込んでいくかという事が大切で、そこに適しているストーリーを設定しなければならないこと、当事者の内面にあることを出し合って、いくことなどがしっかりと組み込まれて行かなければならず、限られた時間で構成していくことの難しさを実感した。

多摩 TS セルフアドボカシー講座「8月1日」展開例	
日時：2020年8月1日（土）14:00～16:00 打ち合わせ12:00～	
場所：天成舎	
担当：MFT 大沼・達	
SFT 阿部 石原 小川 奥田 鈴木 春口 平井 福田 穂積 *50音順	
<p>1. セッションの目的</p> <p>(1) 自分の行動を変えるために主体的な学び方を体験する。</p> <p>(2) 共に学ぶ仲間を形成し、FT・支援者との信頼関係を築く。</p> <p>(3) 豊かに生きるための指針を知り、問題行動のリスクを軽減する。</p> <p>2 本時のねらい</p> <p>「暮らしの中の自己選択・自己決定 自分で決める」</p> <p>交際の時の分かれ道を共感する</p> <p>その他※ウイズコロナセッションで座り方などを工夫するが最初はソーシャルディスタンスを優先し、一人一人が離れて座るレイアウトにする。</p>	

時間配分	テーマ	留意点
導入 13:00 13:05 13:10	挨拶 前回の復習 ・それぞれの職場での状況や作ったものについて聞いてみる	
展開1 13:15 10分	・前回から今日までの間の出来事で嬉しかったこと悲しかったことを発表 ・仲間の嬉しかったこと怒りを感じたことをみんなで共有する。	・人にはマイナス面プラス面と感ずることがあることに気づくために設定する。 ・2つ 嬉しかったこと・怒りを感じたことの間をグッドとバッドに分けて考えるように促す。
展開2 13:25 20分	① 怒りや悲しみの気持ちを切り替える方法 どうしたらいいか考える。 ② 自分で考えた切り替えるため「クールタイム」カードに記入する ③ クールアイテムはどんな時に活用で考える。 ④ 各自が考えた活用の場所を発表	
14:45	休憩	

休憩15分	お菓子などを用意してリラックスできるようにする。 自由時間のソーシャルディスタンスを自ら考えて行動するように声掛けする。	SFTはグループメンバーの打ち解け具合や関係性を観察する 飲み物やお菓子は、いつもと違い、一人一人に個性にする。
15:00 展開3 共感ワーク 20分	ストーリーをイラストや写真を示して説明する。 交際の共感① AさんとBさん AさんがBさんを映画を誘い日曜日に行く約束をしていた。 金曜日 Bさんがコロナ感染者数が増えてきたから行きたくないと伝えてきた。 Aさんは、どうしても一緒に観たいと考え「約束していたのに！」と怒ってしまった。 【分かれ道】 ★どうして映画に行けないのと言う気持ち⇒bad ⇒クールアイテム ★コロナ感染増えているから Bさんの気持ちわかる⇒good 三人組でロールプレイ ★クールアイテムの活用	教材1 映画に行きたい・約束をしていた 教材2 グッドサイド・バッドサイドのフリップチャート 教材3 分かれ道のフリップチャート *分かれ道を最初から出す。 *人の気持ちをくみ取る⇒共感ワーク ①どうしても行きたいAさん(映画に行く事しか見えてない⇒分かれ道があることに気づく⇒ストップすることを学ぶ⇒クールアイテムを使うことで冷静になる) みんなだったらどうする? *行きたい気持ちを抑り下げる。 気持ちの高揚を抑えるためのクールアイテム ⇒ホワイトボード(模造紙)で意見を出し合う ⇒バットとグットの意見を両方出る *分かれ道⇒岐路があることを学ぶ(今回は岐路があることをポイントする) *いろいろな事例(ロールプレイ)をやった方がいい。
展開4 15:20 共感ワーク ② 15分	交際の共感② AさんとBさん AさんがBさんを食事に誘い日曜日に行く約束をしていた。 Aさんはラーメンが食べたい Bさんはハンバーグが食べたいといふどこの場所に食べに行くか悩んでしまった。 Aさんは自分の意見が通らなかったでイライラしてしまった。 【分かれ道】 ★どうしてラーメンじゃダメなの!もう知らない! ⇒bad⇒クールアイテム ★今日は Bさんの行きたい場所に行ってみようかな⇒good ★両方食べられるガストやデニーズに行こうかな⇒good	教材1 映画に行きたい・約束をしていた 教材2 グッドサイド・バッドサイドのフリップチャート 教材3 分かれ道のフリップチャート *分かれ道を最初から出す。 *人の気持ちをくみ取る⇒共感ワーク 人は、自分の「良い面」の声、「悪い面」の声のどちらを聴くかを自分で選択できることを強調 共感ワーク!と同様に取り組む 分かれ道という概念をある程度共有できれば良いと考える。 ①どうしても行きたいAさん(ラーメンに行く事しか見えてない⇒分かれ道があることに気づく⇒ストップすることを学ぶ⇒クールアイテムを使うことで冷静になる)

	「分かれ道スキル」を知る	赤信号・青信号のカードを使い、立ち止まるということの思い起こす。
共感ワーク まとめ5分 15:40	大切な視点を確認。 バッドサイド・グッドサイド 分かれ道・チルススキル	教材 バッドサイド・グッドサイド 分かれ道・チルススキル
展開5 振り返り 10分	本日のセッションを振り返る ・何がよかったですか、何が分かりましたか？ ・何が嫌でしたか、何が難しかったですか？ ・次回もっとよくすべきことは何かありますか？ 恋愛という言葉を実際という言葉に拡大していくことを説明する。	当事者の皆さんがどの程度理解したかが必ず確認する。
	「分かれ道スキル」を知る 赤信号・青信号のカードを使い、立ち止まるということの思い起こす。	理解が浅かったところをチェックし、次回以降に反映させる。 相手の気持ちを考えることが出来たかどうか
展開6 15:50 5分	チル・アクティビティ（クールダウン） ・全身の筋肉のリラクゼーション ソーシャルディスタンスで広がり、立ち位置を決めていく。	メンバーの要望やニーズに応じて、毎回変えても良い。※深呼吸スキルは感染予防の観点からやらないこととする。
15:55	挨拶 次回のことを伝える	
16:00	終了	

4. 第3回セッション

日時：2020年8月29日（土）14:00～16:00

担当：MFT 鈴木 小川

：SFT 阿部 石原 大沼 奥田 達 春口 平井 福田 穂積

(1)セッションの目的

- ① 当事者が自己効力感（結果を出す。目標を達成するために必要とされる行動）を予期することが出来、自尊心を高められるようにする。
- ② 当事者の主体的な考察、働きかけを引き出す。
ストップボタンを使いこなし、自分の中にある3人の賢者と3人の悪者を自覚し、賢者の助言を理解し、別れ道でグッドサイドの選択ができるよう、何度も演習する。
- ③ 当事者が周囲から護られている実感が得られるようにする。
信頼してよい人を理解し、信頼の人垣の形成を理解する。

(2)本セッションのポイント

MFT 2名が当事者の日常生活での小さなトラブルを題材にし、参加者が分かれ道から意思決定をみちびくまでの流れを実体験できるように進めていく。

選んだ将来・先を考え、その結果、自分の将来が豊かになるということの意識化を促すことを重点化した。

前半にストーリーを当事者の皆さんの実体験から発表してもらい、休憩中にその中から2つのストーリーを選んで、後半のストーリーとして使用するという、当日仕込みという難しい方法を選択した。

前半終了後ただちにコアスタッフが会場とは別の部屋に集まり、分かれ道のストーリーになるか、わかりやすい構成になるかなどを短い休憩時間に判断した。3回目のセッションであり、これまでの反省点を共有していたのでスムーズに2つを絞り込むことができた。

(3) 実際のセッションの進行状況と当事者の様子



3回目のセッションであり、8月1日からのつながりから参加者の反応は良かった。

MFTは参加者からの話をうまく引き出すことを念頭に、どのような発言から言葉につながるかを試行錯誤しながら進行した。

SFTの存在は大きく、MFTの話当事者たちの言葉につながるやすいように雰囲気づくりする発言がMFTの進行にプラスになっていた。

当事者の最近の出来事を共有でき、身近な問題として話すことができた。

3人の賢者と悪者の名前が英語のために当事者がわかりにくいとのことだったので、「正直な人」「コソコソ嘘をつく人」などとわかりやすい名前に当事者とともに決めた。設問が「正直な人」はどんなことを言うかという問いかけ方法で行った。これまでのセッションで使ってこなかった「波紋」のアイテムを取り上げ、今回は軽く示す程度にして次回以降につなげる予定だったが、出すタイミングなどの工夫が必要と感じた。



繰り返し「分かれ道」→「ストップ」→「クールアイテム」を当事者と例をもとにしていくことで自然に身につくことを意識して進めていった。一定の間隔で行うごとに本人たちの反応が良くなっていると感じた。

(4) 課題点

これまでのセッションの反省点で確認されていた「MFTはしゃべりすぎない事」「良い悪いではなく意見を尊重、否定はしないこと。」「方向づけすぎない事」などの意識を

もって進行したが、導きすぎてしまう面もあった。





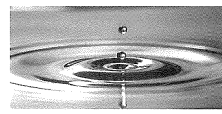


当事者の言葉をより引き出すためには、個々の情報を事前に把握しておいた方がよく、アセスメントの必要性は強く感じた。

当日に課題を2つ選ぶ形としたところ、MFTの力量が問われる形となった。そのため、十分に引き出せなかったところもあったと思える。

当事者の内面にあるさまざまな感情や思いなどを導き出すために、3人の賢者と3人の悪者のキャラクターに関する理解もあった方が、自分の中にいる悪者の声に気づきやすく、発言につながっていくという事もあるが、「嘘つきの悪者だったらどういうか。」という設問にしてしまうと誘導的になりすぎてしまう。

いろいろな意見を言ってもらって、その言葉を3人の賢者と悪者に振り分けていくというところをしっかりと押さえなければならなかった。

多摩TSセルフアドボカシー講座 展開案		
日時：2020年8月29日(土) 14:00~16:00		
場所：福祉作業所天成舎(JR南武線矢川駅徒歩3分)		
担当：MFT 鈴木 小川		
SFT 阿部 石原 大沼 奥田 藤 春口 平井 福田 穂積		
セッションの目的		
1. 当事者が自己効力感(結果を出す。目標を達成するために必要とされる行動)を預期することが出来、自尊心を高められるようにする。 2. 当事者の主体的な考察、働きかけを引き出す。 ストップボタンを使いこなし、自分の中にある3人の賢者と3人の悪者を自覚し、賢者の助言を理解し、別れ道でグッドサイドの選択ができるよう、何度も演習する。 3. 当事者が周囲から感られている実感が得られるようにする。 信頼してよい人を理解し、信頼の人間形成を理解する。		
MFT2名が当事者の日常生活での小さなトラブルを題材にし、参加者が分かれ道から意思決定をみちびくまでの流れを実体験できるように進めていく。 選んだ将来・先を考え、その結果、自分の将来が豊かになるということの意識化を促す。		
Time	内容	関連事項
12:30	事前打ち合わせ	
14:00	始めの挨拶	平井先生
:03	MFT自己紹介 鈴木 小川	
:07	セッション開始 ・前回までの振り返り ・アイテムの確認 ・今日の流れの説明	パウチしたアイテムの説明確認 ・クールアイテム ・ストップボタン ・分かれ道 ・3人の賢者と3人の悪者 自分の中にある声として理解 ・グッドウェイ、バッドウェイ ここは説明だけ
:30	小さなトラブルでの分かれ道と意思決定 身近に起こった問題を当事者に出してもらおう。(一人一つずつ)	各自カードに問題点を書き出してもらおう。事前に支援者に連絡をし、最近悩んだこと困ったことを考えてもらおう ※ 前回作ったクールアイテムを持ってきてもらおう
:35	8つの問題を提示 当事者から出た8つの問題から、2つを選択する。	

14:50	休憩 スタッフで分かれ道課題を絞る	飲み物、お菓子等を用意 SFTは、給仕をしながら何となく当事者の様子把握する。 トイレ等の確認もする
15:05	その2つの問題に対しての考察を重ねる 当事者に参加してもらいグッドサイド、バッドサイドの声を聞く。 感情の意識化(自分の中にある色々な人・感情を意識する) 最終的には、グッドサイドを選択し、良い行動・選択ができたことを皆で確認をする。 ひとケース20分間 出してもらった問題の中から以下の2つの問題に対しての考察を重ねる。 当事者に参加してもらい分かれ道に立ち、ストップボタンを押し、一度立ち止まり、グッドサイド、バッドサイドの声を聞く。 波紋の広がりを使い結果の予測も考えてもらおう。 自分の行きたい道の方に行くためにクールアイテム(道具)の利用 ① 水筒を持っているのに、コーラを買おうとした。 ② グループホームの隣室の人が勝手に部屋に入ってくるのでイライラした。	バッドサイドの声～ いじめる あおる こそこそ  グッドサイドの声～ 正直な人 よく考える 他人のことを考える  共感と結末の予測 グッドサイドとバッドサイドの波紋の広がりの違いを当事者とともに考える。 後に何が起こるか  ケース一つにつき、4人くらいを目途に  
15:45	まとめ、振り返り(小川) アンケート	口頭でアンケートの内容を聞く
:55	クールアイテムで整理(リラクセス)	〇〇さんのクールアイテムを使ってみようか。
	次回の予定	9月12日を伝える
16:00	修了お疲れさまでした。	

5. 第4回セッション

開催日 2020年9月12日(土) 14:00~16:00

担当 MFT 阿部 石原

SFT 鈴木 小川 大沼 達 春口 平井 福田 穂積

(1)セッションの目的

- ① 3人の賢者と3人の悪者が当事者の思考の中にあると自覚、分かれ道に立った時同時に湧く考えであると理解できる様支援する。
- ② 当事者の主体的な考察を引き出す。
ストップボタンを使いこなし、自分の中にある3人の賢者と3人の悪者を自覚し、賢者の助言を理解し、別れ道でグッドサイドの選択ができるよう、何度も演習する。
- ③ 当事者が必要時、支援者に相談できる習慣をつける。

(2)本セッションのポイント



当事者の心の中にあるBADとGOODの両方を肯定的にイメージしやすくするために、大きな人型を設置して、BAD席とGOOD席(各4人)を置いた。

席の前にストップボタンを用意して、大きなアクションになることで行動を認識しやすくした。

ホワイトボードには3人の賢者と悪者の絵を張っておくようにした。

MFTはさまざまなシチュエーションを提示して当事者とSFTにBAD席とGOOD席に指名して座ってもらい、GOOD席の人たちには、そのつもりになっていると自分の気持ちなどを発表してもらうようにし、BAD席も同様にした。SFTは、MFTに指名されてから発表するようにして当事者の皆さんが発表しやすい雰囲気をつくった。



(3)BADな感情や考えの表出

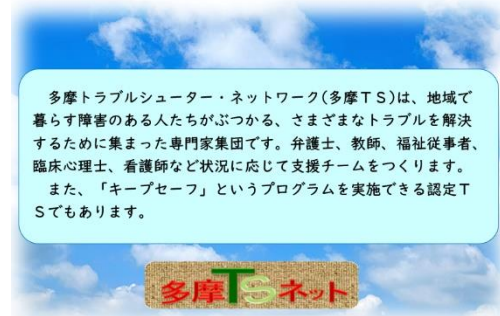
これまでのセッションでは、当事者の皆さんがMFTの期待しているだろう事を忖度して答えてしまう傾向が強く、GOODなことばかりを発言しがちであった。

今回のセッションにおいても、はじめの頃はそうした傾向がみられたが、短く、次々とストーリーを出していくことによって、BADの感情や考えなどが躊躇なく発表されていき、SFTのサポートがいらぬレベルとなった。

(4) 終了証カードの授与

今回で本年度のセッションは一応の区切りとして、次のセッションに向けてメンバーカードおよび修了証を授与することとなった。いつでも振り返られるように、財布などに入れられるサイズのスタンプカード形式にして、カードには、それぞれが参加した回数をスタンプした。

今後の参加について皆さんに何うと、「続けたい」という声が力強くいただけた。



(5) おおきな動きを取り入れたアプローチについて

バラエティー番組のひな壇と言われるようなものと同じように参加者がステージ側に座って、それを見ている参加者もいるという構造にしたことで、席に着いた状態で質問に答えるときの緊張感がほぐれて、まわりの人の発言に促されるように、これまでなかなか発言が少なかった人が自分の考えを発表していた。着座しているときの発言よりも他の人と違う事を言うようなところも見られて、ひとつの方法として十分な効果があったといえる。

(6) ひとつのセッションと複数セッションの構成について

2時間という限られた時間内に首尾が整ったセッションを行う事は重要である。今回のセッションは大掛かりなセットが設営され、当事者の皆さんの高揚感をうまく誘導できたが、それを個人ワークに落とし込み、当事者の内省化に結び付けるには時間が足りなかった。



4回目のセッションであったが、今後は複数セッションの流れの中に効果的に組み入れていくことによって今回の試みがさらに活かされるであろう。

楽しく参加し出来るという事はとても大切なコンセプトであり、今後の多摩TSのキープセーフ for チェンジ

の実践においても今回のセッションは意義のあるものであった。

展開案・進行

Time	内容	関連事項
12:30	事前打ち合わせ	事前準備 背景設置 大きな人型を前に設置。人型の片方を bad 席、もう片方を good 席にし、4人程度座れるようにしておく。人型の前にも椅子を置き、ストップボタンも用意する。 白板には3人の悪者と賢者を貼っておく。(人型を巨大にした理由:参加者皆の心に bad と Good 両方の声があるとイメージしてもらうため) FT と参加者に分断せず双方が一緒に席に就くことで、「bad と Good 両方の声」の意見を出し易くする。
14:00	始めの挨拶 小川	
:03	MFT 自己紹介 阿部 石原	
:05	セッション開始 前回から今日まで、良かったことの報告	最初は SF から具体的な形で報告頂く。 当事者各自、この間の出来事(誕生日会・家族との再会等)を報告。
:15	「人にはbadと good の気持ちがあると勉強したよね。ストップボタンとクールアイテムは、いつ使う?」	これまでストップボタン、クールアイテム等を勉強したことを確認する。(もし参加者から出なかった場合、SF に振って発言頂く。) 各自のクールアイテムの確認。 当事者各自のクールアイテムの確認(空を眺める・ジュースを飲む等)。
:25	今日の流れの説明 (ロールプレイ中心に進めること) 「今日やることの説明。前を見てね。この白い人がどう行動するかを、皆で考えようね。むかむかした時もやもやした時、どう考えるかを、Bad 席と good 席にそれぞれ座って、話してね」	Bad 席と good 席に SF1 人+参加者2人座ってもらう。 SF が参加者に PLM. か書きを振る。 bad から三 ささやき、イ アイテム使用 人型の両側 人座っても
:30	MF が場面設定 ワーク1 「お友達の家に行ったら、友達が席を外し、素敵な時計が取り残されていた」場面を説明。 人型(巨大な棒人形)の前に Bad 席(右)と good 席(左)を用意する。そこに SFT1 人+参加者2人座ってもらう。 bad から3人の悪者の声「今ならとれるよ」「誰も見ていないよ」を SF 支援で参加者がささやき、その後 good から3人の賢者の声「友達をなくすよ」	参加者のからだから駄目か等)振り活用を推奨印象)
		「友達悲しむよ」も発言してもらい、席に座った全員にストップボタンを押してもらい、クールアイテム使用、最終的にどう行動するかを発言頂く。
		15:00 ワーク2 「通勤バスに乗ったら、好きな同僚が先に座っていた。隣席が空いていたので、今なら隣に座って触れる!と思った」
		人型の両側、Bad 席と good 席に SF1 人+参加者2人座ってもらう。 参加者の発言「怒られるとまずいかな」に対し、MF が「その声は bad か Good か」等振り返りを促し、逡巡した反応から気持ちを中心に。他の参加者の意見も聴取、「距離を持ったほうがいい」との発言を引き出し、ストップボタンを押す行動につなげた。
		14:50 休憩
		参加者の様子を見るスタッフを除き、後半の打ち合わせをする。
		15:20 ワーク3 「職場の道具を壊してしまったけど、報告できなかった。翌日職場を休みたくなってしまった」
		(休憩中の検討で、「参加者が前に登場する」事で表情が良くなったとの意見あり、全員参加型に変更) 人型の前に参加し全員並んで座ってもらう。 参加者の発言「素直に謝る」「誰かのせいにする」等を聴取するうち、慣れたのか「bad な声」が沢山聞かれるようになった(「家族旅行で逃避する」「たまたま壊れたのを発見したふりをする」「機械のせいにする」等)。 "bad な声"を選択した場合の結果を聞く(「家族に怒られる」「皆と会えなくなる」「首になる」等)。 上記の気持ちから、ストップボタン行動につなげる様に促した。
		15:40 参加者の感想(SF 含む)
		最初に SF に振り、その後参加者一人ずつ話して頂く
		:50 まとめ、振り返り 平井
		:55 終了証授与
		平井・福田
		16:00 修了一お疲れさまでした



6. 令和2年度セッションのまとめ

(1)開催頻度について

本年度を迎えるにあたって1年間を通じて奇数月実施、計6回のセッションを計画していたが、新型コロナ感染拡大に伴い計画を大幅に変更せざるを得なかった。第一波感染収束を確認し、予想される第二波までの間に行うこととした。7月18日から9月12日の間に5回のセッションを組み込んだ。昨年度のセッションで当事者の参加人数が増加していたが、感染予防の観点から生活や日中活動面で把握できること、参加ルートが安全であることなどから人数を絞って行った。会場も普段から感染予防対策をしっかりと行っている国立市にある天成舎(就B・生活介護事業所)に限定した開催とした。

約2か月間にはほぼ2週間ごとの開催になったが、当事者の理解度の進展と主体的な参加度合いの変化、支援者と当事者の信頼関係の構築という観点から今回の開催頻度が最適であるという印象を持った。

多摩TSではSOTSEC-IDを実施したときは毎週開催でほぼ6か月間セッションを実施したが、当事者同士、支援者同士、そして双方間に強い信頼関係ができた実感があった。計画通りに2か月毎・計6回のセッションを実施したとしたり、今回のような雰囲気まで醸成できなかつたと実感させられた。

(2)テーマ設定とキープセーフの基本構成

①分かれ道課題の設定

テーマは、前年度の参加者の強い希望で「恋愛」としたが、キープセーフのテーマとして恋愛は成立しないという堀江先生の指摘から「交際」として、各セッションは交際に関連する場面設定をしてきた。

多摩TSで当初設定した「恋愛」というテーマは、各セッションのテーマではなくてキープセーフ for チェンジをとおして、恋愛のイメージを深めていくということだった。それはベーステーマとしては良かったのではないかと感じた。

問題は恋愛というシチュエーションに潜む「分かれ道課題」の設定であった。5回のセッションを通じて課題設定としては成立していないものもあり、修正していった。

②当事者の内省化

分かれ道課題となるストーリーを通じて当事者の内面にあるBADやGOODの感情を導き出していくというプロセスは最も重要なものだが、そこにかかる時間配分や

MFTの設問の設定、個人ワーク用のツールなどが十分に機能しきれていない面があった。

③ツールと用語の理解

セッションに使われるメインツールや用語について当事者の理解に隔たりがあった。最も早く定着したのがストップボタンだったが、それに比べて三人の賢者と悪者、分かれ道の男などの理解は定着しきれていなかった。今後はツールの理解という事をもう一度丁寧に積み上げられるような構成にしていく必要がある。

用語においてもGOODとBADのイメージ共有が十分ではなかったと感じた。日本語に置き換えも検討したが、それは、「良し・悪し」ということになり、勧善懲悪ストーリーを好む傾向にある知的や発達に障害のある人たちにとって、悪いことを考えること自体がよくないという感情をもたせてしまい、自分事に導いていくときの障壁になりがちだった。あえて英語にすることでよい意味であいまいな幅広いイメージをつくりやすいと実感したが、それにも丁寧に積み上げていくプロセスが必要だと思った。

③チャレンジ

セッション会場が心理検査場のような雰囲気ではなく、当事者がワクワクを期待できるような雰囲気やツールの質感を大切にしたい。さまざまな画像ツール、ロールプレイ用のツール、会場全体の演出効果のあるツールなど、短い期間にいろいろとチャレンジできた。

多摩TSではキープ f o r チェンジを広めていくことを活動支柱に置いている。そのためのひとつの型をつくっていき、ツールなどの財産を増やしていくこととなっているが、その点において今回のチャレンジはよかったと考えている。

ただし、キープセーフ f o r チェンジの基本構成をゆがめてしまいがちな余計な情報やツールに気を取られてしまう当事者など課題点も散見できた。

楽しくセッションを進めていくということを重点化しながらも、効果的なツールになるように精査していく必要がある。

④多摩TSらしい課題点

多摩TSの構成は教員や福祉従事者の割合が多いのが特徴となっている。それがセッション進行において、MFTがしゃべりすぎてしまう、誘導的な設問になってしまうなどの課題点に影響してしまい、全セッションを通じて反省点になった。

キープセーフ for チェンジは、学校や福祉事業所、地域などでさまざまな人材がかかわるように改良されているプログラムである。そのため今回の多摩TSの課題点は実践を広げていくという目標においてとても重要になっていく。心理職などによる専門的な助言を受けて、教員や福祉従事者がよりよく実践していけるような下地を今後探求していくという多摩TSの新たな目標が見出せた。

⑤棒人間と表情ツール



恋愛に関連する分かれ道課題を設定していく上で、また、性問題行動に関しても、それは男女という関係性だけではない。

そのため、さまざまな画像ツールにおいて棒人間を用いた。

棒人間には表情が描かれていない

が、状態描写でさまざまな感情を思い起こさせていくためにはむしろ効果的であった。



表情の理解、感情の理解に、そのとらえ方に大きな隔たりがあった。シートにマークを置くというワークにおいて戸惑いがあった。感情表現の少ない棒人間と、感情の類型は双方補う形で大切なツールであると感じた。

(3) 今後に向けて

①準備

参加の敷居が低く、汎用度の高いキープセーフ for チェンジであるが、プログラムとして成立させるためには、「分かれ道課題」の抽出において参加者のアセスメントは丁寧に作り上げていく必要がある。

②セッション導入期

さまざまな必須ツールがあり、その使いこなし度がプログラムの成否につながる。参加する当事者の理解度にばらつきがあるとプログラムの実効性が著しく低下する。

③セッションテーマとストーリーのつながり

例えば今回は、通しテーマ「交際(恋愛)」であったが、各セッションのテーマと分かかれ道課題の設定のまとまりが重要であった。通しテーマによってセッション数が異なっていくが、各セッションが当事者にとって連続性をイメージしやすいものであった方がよい。

④繰り返しの重要性

「そのときどうする？」ということをストック→落ち着く→自分の感情や考えを知る→GOODな選択を自分で行うというパターンに落とし込んで、当事者が使いこなしていくことが最も重要な事であるので、セッションにおいてもその繰り返しを十分に意識して設定しないといけないと感じた。

一方的な説教にならないこと、BADな選択をしないとGOODな状況が待っているという知的や発達に障害のある人たちにわかりやすい構成であること、そうしたことに実効性があるという感触を持てたことが本年度の一番の収穫であった。

技術論に終始して教育や福祉の現場での普及にブレーキがかからないように、多摩TSらしいチャレンジと実践を今後とも続けていきたいと強く思わされた。

(文責 福田和弘)

新潟トラブルシューターネットワークの活動

2018 - 2020 年度

竹田一光◎新潟TSネットワーク



はじめに

新潟というと、皆さんはどんなイメージでしょうか？

田中角栄？(ちょっと古すぎたかな…)、米どころ(魚沼産コシヒカリ!)、酒どころ、元知事の米山さん？

昔はよく「関東甲信越地方」と言われていたのですが、最近は「関東甲信地方」と「越後」の「越」がいつの間になくされた呼び方をされることが多くなり、障がい福祉業界の地区分類でもある時は北陸ブロック、ある時は東北ブロック、ある時は中部地方、と、それが幸なのか不幸なのか所在の曖昧

な「地方」です。

新潟県の人口は、約220万人(2020年10/1現在)、その内、県庁所在地である政令指定都市の新潟市の人口は、79.2万人(2020年12/1現在)。上記の地図に示した通り、南北に250kmにも及ぶ細長〜い県です。高速道路を乗り継いでも縦断するには5時間半、下道だけで移動しようとするると9時間!もかかってしまうという特徴があります。豪雪地帯も多く、関東からのスキー客で賑わったのは、はるか昔でしょうか……

そんな新潟県に、新潟トラブルシューター(以下、TSと略)ネットワーク(以下、

“新潟TSネット”と略)の活動が生まれたのは、2015年5月24日(日)の事。新潟司法福祉研究会第8回目の会合として、新潟県では初めてとなる「TS養成研修」を開催したことに始まります。

設立から5年半を経過した現在では、後述する4つの領域における活動を展開しています。

本報告では、2018年4月～2021年1月末現在まで約3年間の中で、文部科学省の生涯学習活動の一環として取り組んできた2017年7月～2018年9月にかけて取り組んできた「新潟SOTSEC-ID研修会」と、2019年1月～2020年3月にかけて取り組んできた知的・発達障害者の為の「セルフアドボカシー支援」研修会活動、「犯罪に巻き込まれないための本人の学び」啓発活動の実践の第一歩としての2020年10月～2021年1月末現在にかけ2021年9月終了予定で取り組んでいる新潟keepsafe 長期講習を中心に報告させていただきます。

1. “新潟TSネット”の活動目的

新潟TSの活動目的は、「地域でトラブルに巻き込まれた障害のある方や認知症高齢者の支援」です。この目的の為、福祉、矯正、医療、看護、教育、司法などの分野の関係者が集まり、任意団体を立ち上げ活動をしてきました。

その活動は、「地域でトラブルに巻き込まれた障害のある方や認知症高齢者の支援」に関する不定期の勉強会の開催や、文部科学省生涯学習活動の一環としての罪を犯してしまった障がい当事者への各1年間の連続講座の実践、メーリングリス

知的障がい・発達障がいのある人のための
トラブルシューター
養成セミナー
基礎コース

日時：平成27年12月26日(土) 10:00～16:30
 会場：新潟ユニオンタワー2階 女性団体交流室2
 参加費：1000円 資料代：500円 定員：60名

主催：NPO法人Panda-J

プログラム

- 第1講座 10:00～10:50 「トラブルシューターとは何者か?」
- 第2講座 11:00～12:00 「自分の権利を知ろう!」
- 第3講座 13:00～14:00 「トラブルの対応はどのように?」
- 第4講座 14:15～15:15 「障害者に対する権利」
- 第5講座 15:30～16:30 「トラブルシューターとしての役割」

※終了後、懇談会があります! 17:30～レストラン彩巴(いろは) 5,000円

ト(35名が登録)での情報交換が主になります。

その活動は、大きく分けると、次の5つに整理できるかと思えます。

①県内各地でのTS養成基礎コース研修の開催、

②「性被害・加害者にならないために」を掲げたTS養成アドバンスコース研修の開催、性加害を起こしてしまった知的・発達障害者向けの「新潟SOTSEC-ID」連続勉強会の開催、

③「暮らしのルールブック」活用講座を出発点にした「障がい当事者に対してのセルフアドボカシー支援研修会」の様々な場面での開催と啓発活動、

④「犯罪に巻き込まれないための本人の学び」啓発活動の実践の第一歩としての「新潟keepsafe 正規長期講習会」の開催、

⑤司法面接・意思決定支援・地域生活定

着支援センターやホワイトハンズの活動紹介など時々の大事な勉強会の開催、以上です。

本報告では、これら5つの活動の中から、文部科学省の生涯学習活動の一環として取り組まれてきた(いる)②、③、④について、細かく説明していきたいと思えます。

2. 2017—2018 年度の活動

新潟 SOTSEC-ID 活動実績

上記のジャンルで分けると②の性加害を起こしてしまった知的・発達障害者向けの「新潟 SOTSEC-ID」連続勉強会の開催が、2017 年度の中心活動となりましたが、これは前年 2016 年 8/7 に「性被害者・加害者にならないために」と題した T S 養成研修アドバンスコースの新潟市での開催に触発されたものでした。この研修での学びが、同年 10/15 に東京 p a n d A - J 研究所で開催された SOTSEC-ID の支援者研修会に新潟市障がい者基幹相談支援センター西の相談員が公務参加したり、新潟 T S ネットのメンバーである当時新潟県地域生活定着支援センタースタッフを新潟 T S として組織派遣する原動力となった訳です。

そしてこの流れが新潟 SOTSEC-ID プログラムを、基幹相談支援センターや地域定着支援センターの公務で担っていく礎にもなりました。

とは言うものの、本場イギリスでは毎週 1 年間全 60 回が基本、という SOTSEC-ID 研修会を自分達が地元地域で開催するという事は、あまりにも壮大すぎ、どうする？ どうする？ と正直足踏みを繰り返

していたのがこの 2016 年度でした。

ところが、そうして躊躇しているうちに、本プログラム参加対象候補の一人が再犯してしまい逮捕され刑務所に収容されるという事態が発生してしまいました。もう待てません。背中を押される気持ちで、まずは講座を実行し運営していくコアメンバー・協力者を募るべく「SOTSEC-ID を新潟でやろう！」3 回連続勉強会を開催しました。これが 2017 年春の事です。

事務局を新潟 T S ネットが務め、その事務局メンバー 4 名に新たに 3 名が加わり、まずは 7 名のコアメンバーで、文科省科研費(主任 研究 堀江まゆみ:白梅学園大学 教授)2015 年度～ 2017 年度研究助成を受け、船出をした訳です。

日時は、2017 年 4/16、4/23、5/14、いずれも日曜日の 10 時～16 時に、会場として休館日で人が来ない新潟市内の地域活動支援センターの施設を借用し、講師として N P O 法人 P a n d A - J から堀江まゆみ先生・平井威先生に毎回新潟までお越しいただき、しっかりとこの“SOTSEC-ID”プログラムの考え方を学びました。



〈▲3 回に渡り行われた準備勉強会〉

この 3 回の本プログラム準備勉強会には、事務局・コアメンバーの 7 名の他に、趣旨に賛同をいただいた 16 名が県内各地

から参集してくださいました。大学教授、精神科医、児童相談所職員、弁護士、刑務所法務教官、特別支援学校教員、地域生活定着支援センター職員、障害福祉サービス事業所職員、基幹相談支援センター相談員、障がい者計画相談支援専門員、触法者支援民間団体職員、独立型社会福祉士、学生、と実に幅広く豪華な顔ぶれです。

3回連続講座の参加者にはメーリングリストを通じて、毎回のセッションの開催日をお伝えし、当日協力出来る方を募っていくやり方としました。結果的に、この流れの中でコアメンバーは12名まで増え、単発での協力者を含めると15名にまで拡大しました。

いよいよ本プログラム開催の準備は整いました。新潟での実践は、既に先行実践として東京都多摩地域で開催された毎週、半年間連続、計30回開催された「多摩SOTSEC」の実践に多くを学びながら、開催を続けてきました。新潟SOTSEC-IDのコンポーネントは基本的に多摩のプログラムを下敷きにさせて頂いています。

プログラムの対象者は多摩SOTSECを参考に、5名前後を考えていましたが、最終的に3名と決まりました。

この陣容で、満を持して2017年7/30(日)に当事者・ご家族への説明会を開催。そして、8/20(日)の第1回セッションの実施となった訳です。第2回目の話し合いでは、「STYLISH イケ★メンズ」というこの勉強会参加メンバーのグループ名も決まりました。以降、カレンダー通り、2週間に1回のセッションを間を空ける事なく積み重ね、翌2018年9/30(日)の第30回目の最終セッションまで、1年間、

参加メンズが再犯する事なく無事に開催することが出来ました。

その後2018年11/18(日)に、全30回プログラム終了後のメンバーの変容を確認すべく、コアメンバー10名でリスクアセスメント「アルミージロ」を実施。参加してくれた3人の触法障がい当事者(プログラムでは“メンズ”)の効果測定を行いました。

さらにプログラム終了後3カ月後となる2019年1/6(日)には「謹賀新年カラオケ大会！振返り同窓会番外編セッション」を、さらにそれから6カ月後となる2019年7/7(日)に「七夕BBQ大会！振返り同窓会番外編セッションその2」を開催し、「新潟SOTSEC-ID(ソトセックアイディー)」メンズが参加してくれた企画としては全33回となった一連のプログラムにピリオドを打ちました。

2020年1/18(土)には、プログラム開催に向けて行われた3回の連続準備学習会に参加してくれた方を中心に40名の参加者の元「新潟SOTSEC-ID実践報告会」を開催、係わってくれた全ての皆様への報告と、今後に向け更なる活動の継続の機会としました。



〈▲40名が参集！SOTSEC 実践報告会〉

[ソトセック新潟実践報告会 概要]

日時：2020年1/18(土) 13:30～16:30

会場：新潟ユニゾンプラザ5階中研修室

内容：

(1)SOTSEC-IDとは？

(2)新潟での実施の概要

- ①新潟TSネットワークについて
- ②新潟での実施のきっかけ
- ③参加者の特性や性加害行為の概要
- ④プログラム実施に向けた準備

(3)新潟版 SOTSEC-ID のプログラムの実際

- ①仲良くなるワーク
- ②自己開示・参加目標・グループ名決定
- ③パブリックとプライベート
- ④自分の失敗に気づこう
- ⑤感情を知ろう
- ⑥自分の体の変化を知ろう
- ⑦性について知ろう
- ⑧Stylishイケ★メンズになる為のABC
- ⑨ABCを知ろう
- ⑩被害者への共感
- ⑪もうしないために
- ⑫素敵な男プランを作ろう
- ⑬これまでのセッションを思い出そう
- ⑭家族へ伝えよう
- ⑮出発式

(4)SOTSEC-ID の効果

- ①リスクは減少したか
(ARMIDILO-Sの結果から)
 - ②SOTSEC-IDのコンポーネント実現度
 - ア 自尊心は向上したか
 - イ 認知の偏りは修正されたか
 - ウ 被害者への共感性は向上したか
 - エ 対人関係の機能は向上したか
 - オ 性的な好みを改善できたか
- ／健全な性について学べたか

カリラプス・プリベンションを実行できるか

⑤今後の方向について

40名の参加者の顔ぶれ

- 基幹相談支援センター相談員 10名
- 地域生活定着支援センタースタッフ 3名
- 特別支援学校教員 3名
- 障がい児・者計画相談員 3名
- 障がい福祉事業所 11カ所 14名
- 触法障がい者支援NPO 2名
- 障がい当事者親 1名
- 鑑別所職員 1名
- 市役所行政 1名
- 独立型社会福祉士 1名
- 弁護士 1名



3. 新潟 SOTSEC-ID プログラムを実施してみても

新潟 SOTSEC-ID プログラムに参加してくれたメンズは、以下の3人の男性です。
Aさん：20代 中等度知的障がいと自閉症スペクトラム 療育手帳B (WAISIII IQ51)

Bさん：10代 自閉症スペクトラム障害
手帳なし 境界知能（IQ70）

Cさん：20代 軽度知的障がいと自閉症
スペクトラム、緘黙 療育手帳B
（IQ：63）

年齢・障がい状況・犯歴もバラバラな3人…

当初、この3人でグループを組めるのか？そもそも一緒に学ぶ体験を共有できるのか？仲良くなる共感的・共闘的關係性を築けるのかすら、不安な状況でした。

しかし、状況としては、

[プログラムの内容の理解]

⇒ふりかえりテストは、3人ともほぼ満点

（応用力はもう少し伸びる余地あり）

[自分について語るコミュニケーションの促進]（分からないこと、できないことも語れる）

⇒Aさんは、当初周囲の発言に追隨していたが、後に率先して発言するようになり

⇒Bさんは、自分の話を聞いた相手の認知を気にかける場面が増えた

⇒Cさんは、筆談だが、とにかく説明の分量が増えた

[目指す「イケメン」像のブラッシュアップ]

連帯感からか、他のメンバーを配慮した行動

⇒他のメンバーの発言を待つ、受け止める、といった行動も出てきた

総じて、自尊心の向上、対人関係機能の向上が顕著でした。

このプログラムを通じて、分かった事は次の事です。

○自分の体に関わる性について、学ぶ機会がなかった

⇒性の話を真剣に聞くメンバー

○どうして自分の行動が非難されるか、学ぶ機会がなかった

⇒被害者・家族の気持ちを知ってショックを受けるメンバー

○どうすれば社会的に認められるか、学ぶ機会がなかった

⇒性的な行動や怒りなどの衝動のコントロール、周囲との関係の築き方等

◎つまり、「性」×「犯罪」×「障がい」という“三重の係わりにくさのファクター”に親・教員・支援者・周囲の大人が影響され、本人に学びの機会が提供されない、本当の理解に導いてもらえないまま彼らが放置されてきた状況が見えてきました。

知らない（未知※本当に理解できる迄丁寧に教えてもらえない）状況下での“誤学習”が彼らを性犯罪に導いてきたという背景要因が浮かび上がってきたのです。

有体に言えば、我々の社会が「彼ら（性犯罪を犯してしまう知的・発達障がい者）」を作り上げて来ていたということです。

さすると対処法は見えてきます。とても大変な道のりになりますが、必要なのは、彼らが本当の理解に到達するまで、丁寧に学びの機会を提供し続けていくということになります。そして、第二・第三の彼らを「育成」しない為に、早くから、丁寧に、きちんと、確実に知識を届け続けていく事に尽きるのではないのでしょうか。

それをせずして本人達にのみ問題があるとばかり本人達に「反省」の強制を先行させていくと、岡本茂樹著「反省させると犯罪者になります」（新潮新書）で指摘されている愚行を繰り返していく事になる

ということでしょう。このことは、ベストセラーとなった宮口幸治先生が著された「ケーキの切れない非行少年たち」(新潮新書)でも、より詳しく論証されています。

4. 2019 年の活動

セルフアドボカシー支援に向けて

新潟県における「障がい当事者のセルフアドボカシー支援」活動は、平成 30 年 11/10 東京で開催された全国 T S ネット活動報告・作戦会議に参加した新潟市障がい者基幹相談支援センター西の相談員が、主催：N P O 法人 P and A-J, 新潟トラブルシューター、新潟市基幹相談支援センター西という枠組みで、平成 31 年 1 月 26 日に『暮らしのルールブック活用講座』in 自立訓練事業所ドリームカレッジを開催したことが始まりです。



〈▲大雪で ZOOM で大阪と新潟を結んだ〉

新潟県での「セルフアドボカシー支援活動」のキックオフともなったこの講座では、社会福祉法人南光愛隣会の南口さんを講師に、第一段として支援者向けの説明・障がい当事者への講座(パイロット)が行われ、障がい当事者 6 名と支援者 14 名が参加。研修当日、新潟県は大雪。大阪からの飛行機が欠航となり、急遽、大阪から南口さんがインターネット

を介し ZOOM というアプリを使っでの ICT 研修会となりました。

そしてそれを受けて、新潟市障がい者自立支援協議会相談支援連絡会相談支援体制強化班が主催となり、平成 31 年 3 月 4 日(月)[『障害のある人とともに考えるセルフアドボカシー支援』～暮らしのルールブックの活用～in 新潟市]の開催に繋がりました。

この研修会は、暮らしのルールブックを様々なところで活用してもらうため、主に支援者を対象に開催したものです。講師には 1 月のリベンジではないですが満を持して社会福祉法人南高愛隣会法人法務・相談室の南口英美さん、東京 TS から山田弁護士、新潟 TS 代表の小出弁護士を迎え、1 月活用講座(パイロット)に参加してくれた障がい当事者にも報告者として参加して頂く形にしました。

短期間の周知にもかかわらずあっという間に 100 名を超える申込が寄せられ、会場の関係で申込をお断りせざるを得ず 86 名の参加となりましたが、この問題の関心の高さを裏付ける形となりました。



〈▲市内外から 100 名の応募が殺到した〉

そして、この講座の盛況ぶりが令和元

年度の新潟市障がい者地域自立支援協議会相談支援連絡会権利擁護班の年間活動方針の柱の一つとして「障がい当事者のセルフアドボカシー支援活動」が位置付けられる契機となった訳です。

こうして、令和元年度における「障がい当事者のセルフアドボカシー支援活動」は、新潟市障がい者地域自立支援協議会の活動が先行する形で展開されていく事となりました。

その組立と実績は、下記の通りです。

- (1) 地域活動支援センターを会場にして
の障がい当事者対象の公開勉強会

2019年

第1回：6/5(水) 13:30～14:30

「自分の情報は他の人にもらさないんだよ」※終了 参加者:24名(当事者15名, 家族1名, 支援者3名, 主催スタッフ5名)

第2回：6/19(水) 13:30～14:30

「ネット犯罪に気をつけよう」※終了 参加者:16名(当事者11名, 支援者1名, 主催スタッフ4名)

第3回：7/2(火) 13:30～14:30

「プライベートとパブリック」※終了 参加者:16名(当事者12名, 支援者1名, 主催スタッフ3名)

第4回：7/16(火) 13:30～14:30

「ものを盗んだらどうなる？」※終了 参加者:17名(当事者12名, 支援者1名, 主催スタッフ4名)

第5回：8/7(水) 13:30～14:30

「ものを盗んだらどうなる？～その2」※終了 参加者:14名(当事者10名, 支援者1名, 主催スタッフ4名)

第6回:8/21(水) 13:30～14:30

「ものを壊したらどうなる？」※終了 参加者:13名(当事者9名, 支援者1名, 主催スタッフ3名)

第7回：9/5(木) 13:30～14:30

「だます手紙(詐欺)と正しい手紙の出し方」※終了 参加者:14名(当事者9名, 支援者1名, 主催スタッフ4名)

第8回：9/17(火) 13:30～14:30

「性犯罪を考える～その1」※終了 参加者:13名(当事者9名, 支援者1名, 主催スタッフ3名)

第9回：10/1(火) 13:30～14:30

「性犯罪を考える～その2」※終了 参加者:名(当事者名, 支援者名, 主催スタッフ名)

第10回：10/15(火) 13:30～14:30

「人から誘われた時は気を付けよう」※終了参加者:名(当事者名, 支援者名, 主催スタッフ名)

第11回：11/7(木) 13:30～14:30

「やめられなくなる時があります」※終了参加者:名(当事者名, 支援者名, 主催スタッフ名)

第12回：11/21(木)「こころの停止ボタンをみつけてつかってみよう」

参加者:17名(当事者11名, 支援者1名, 主催スタッフ5名)

第13回：12/20(金)「言っていることわるいこと 参加者:24名(当事者17名, 支援者2名, 主催スタッフ5名)

2020年

第14回:1/20(月)「こんな時はどんな行動がよいだろう」※終了 参加者:15名(当事者11名, 支援者1名, 主催スタッフ3名)

第15回:2/19(水)「教えて!こころの大

きさ、速さ」※終了 参加者:17名(当事者10名,支援者4名,主催スタッフ3名)

*この地域=新潟市西蒲区の障がい者地域自立支援協議会で地域課題の一つとして挙げられた「セルフアドボカシー支援の必要性」の課題に対応して地区担当の障がい者基幹相談支援センターが業務として対応するという枠組みで実施されています。



◀参加者は和気藹々ながら真剣さも

(2) 支援者に対する研修会

a 障がい福祉サービス事業所職員

2019年7/20(土) 10:00~12:00

「性トラブルにどう対処?~実際に困っている事例で考えよう」※終了

参加者:50名(職員48名、主催スタッフ2名)

*新潟市障がい者地域自立支援協議会相談支援連絡会権利擁護班の今年度活動方針である「セルフアドボカシー支援」の一貫として啓発としての研修会講師を本業公務で担っている。

b 特別支援学校教職員

2019年7/30(火)9:30~11:30

「犯罪に巻き込まれないための本人との学び(暮らしのルールブックの活用)」

参加者:特別支援学校小・中・高等部での教職員・寄宿舎支援員54名※終了

*この地域=新潟市西蒲区の障がい者地域自立支援協議会がく・ふく連携会議で要請があり、担当の障がい者基幹相談支援センターが本業公務として対応~上位にある市自立支援協議会権利擁護班活動ともリンク

c 身体・知的障がい者相談員

新潟市身体・知的障がい者相談員研修会

2019年10/10(木)14:05~15:25

「犯罪に巻き込まれないための『地域づくり』と『本人との学び』セルフ・アドボカシー支援(暮らしのルールブックの活用)」

参加者:約60名

*新潟市主催:自立支援協議会権利擁護班で講師を担う

2020年10/7(水)10:00~12:00

「障がい者の権利擁護とトラブルシューター活動」

参加者:約60名

*新潟市主催:新潟TS代表が講師担当

d 地域生活定着支援センター職員

2019年9/27(金)9:50~10:30

社会福祉士会受託地域生活定着支援C研修会

「新潟トラブルシューターの取組み新潟SOTSEC-ID」

参加者:約30名

e 障がいのある方への地域生活支援者

2019年11/9(土)11:15~12:30

新潟県地域生活支援ネットワーク2019

「実践報告 トラブルなんてこわくない!~SOTSEC-IDという実践を知る~」

参加者:約50名

f 障がいのある方のご家族
新潟地区手をつなぐ育成会会員研修会
2019年10/23(水)10:00~12:00
「楽しく生きていくために～セルフアドボカシーについて考える」
参加者：約35名のご家族
*市自立支援協議会権利擁護班の今年度活動方針である「セルフアドボカシー支援」の一貫として本業公務として研修会講師を担っている

5. 知的・発達障害のある人の性問題行動と危機支援のためのグッドウェイ・モデルに基づく構造化された長期介入プログラムKeepSafe2020の新潟市での実践

新型コロナとそれに基づく全国緊急事態宣言に翻弄されて幕をあげた2020年、PandA-Jの堀江先生より「[性問題行動KeepSafeプログラム]@ZOOMインスト養成研修のお知らせ」と題した1通の研修案内メールが届きました。

以下、紹介します。

全国のTSネット・[認定TS希望]つながりの皆さん

性問題行動[KeepSafe]プログラム受講希望の皆さん

当事者TS「セルフアドボ」本人講座[キープセーフFC]受講希望の皆さん

*新型コロナの影響は、今年や来年度までも続く覚悟と準備が必要と言われています。私たちも、あらためて腰を据えて、焦らず、今まで継続してきた仕事を途切れることなく、皆さんと一緒にやり続ける体制、を作っていきたいと思ひます。頭

はクールに以下を企画しました。少しずつでも前に進んでいきたいと思ひます。

《ZOOMでのインストラクター養成研修》を開催します*受講者を募集します
[認定TS]希望のTS・グループの方
[性問題行動KeepSafe]

プログラム受講希望者

[当事者TS「セルフアドボ」本人講座キープセーフFC]受講希望者

[対象]支援者、教員、児童相談所等関係機関の関係者、医療者、他本人支援に関わる方

これまで私たちは、性問題行動・性犯罪リスクのある知的障害・発達障害の思春期・青年期・成人期の本人のための《危機介入プログラム・認知行動療法》を以下、実施してきました。

「SOTSEC-ID」(高リスク・性加害リスクのある成人向け)

「KeepSafe」(中リスク・性問題行動のある思春期/青年期向け)

「キープセーフforチェンジ」(低リスク・多様な社会的ルールやトラブルから自分を守る)

これらのプログラムは、

- 基本的に「全国各地TSを基盤に実施」するために、
- 各地TSの方たちに「認定TS」となっていたりたく考え、
- プログラム実施を考えている各地TSの皆さんにインストラクター養成研修を受講していただき、
- 受講修了者向けの[正規の認定証]を受けていただきたい

と考えて企画を進めてきました。

★ですが、(新型コロナで)3月研修が

延期になるなど検討してきましたが、
2020年度は、

- ・「集会形式」のインストラクター研修は実施は困難ですので、
- ・[KeepSafe ZOOM研修@ネットでのインストラクター研修]を実施することにいたしました。

★関心のある方、少しでも各地で実施したいと考える方、受講したい方は、
[KeepSafe 専門グループ KeepSafe Japan (代表 堀江@白梅学園大学、副代表 高岸@熊本大学・平井@明星大学・橋本@弁護士)]までご連絡ください。

とありました。

ここで、「keepSafe」について、少しだけ説明させていただきます。

- [目的]1. 豊かに生きるための発達支援
(ニーズを、社会に適応した方法で満たす)
2. 再犯に至るリスクの低下(ニーズを、性加害や他の不適切な方法で満たさない)

- [対象]・男性、プログラム開始時の年齢は12～17歳(～25歳)
・知的障害および社会性の障害がある
・性問題行動がある
・キープセーフに参加する保護者/養育者がいる
・治療の適合性のスクリーニングを経ている

と、されています。

(5/30から開始された「keepSafe インストラクター正規研修」資料より)

このメールを受け取った新潟県の、こ

の問題に関心のある支援者一人ひとは、この機会を生かし、様々なセルフアドボカシー支援の実践の中で見えてきた“地域で困難を抱えている本人・家族・支援者”が明日に希望が持てる状況を作り出そうと研修参加呼びかけに応じる決断をしました。

それが、新潟県内各地からの参加申込をされた16名の希望者です。その内訳は、新潟市障がい者基幹相談支援センター9名(全18名の相談員の1/2)、新潟県地域生活定着支援センタースタッフ2名、特別支援学校教員1名、地域活動支援センタースタッフ1名、柏崎の障がい福祉サービス事業所スタッフ3名、となっていました。

こうして私達は、「性問題行動 KeepSafe プログラム@ZOOM インストラクター養成研修の連続講座」(5/9プレ研修、5/30①、6/6②、6/13③、8/2④対面実務演習)に集った訳です。

このことは前4章で報告した「セルフアドボカシー支援」の様々なテーブルでの活動が実を結んだ結果なのかもしれません。

基幹相談支援センターの支援で言えば、「あそこでは障がいのある性加害の触法の方に対しても支援を展開しているらしい」という噂は、広報などしておらずとも、口づてに自然に広がり、吸い寄せられるように類似の相談があがってきます。一方で、主体の側にも、ソトセックやセルフアドボカシー支援の学習を行えば行うほど、通常の相談の中に背景要因としての環境の問題や誤学習というファクターが透けて見えるようになってきます。その相乗効果の中で、さらに自らが学びを深めねば…というモチベーションに繋がっていったるのかもしれません。

こうした見えない連鎖が開催を待ってい

たかのような16名の受講申し込みに繋がった様に思うのです。

私達16名は、こうしてプレ研修、3回の連続講座を受講し、新型コロナウイルス感染状況が少し落ち着いた8/2(日)には静岡県と福井県の受講者も含めて、新潟市の総合福祉会館を会場に仕上げとなる最終的な対面実務演習が行われました。残念ながら、所属法人の新型コロナウイルスに対する対応の違いから最後の最後のこの対面実務演習に2名の方が参加出来なかった為、新潟県には、この養成研修を通し、合計14名の正規インストラクターが誕生しました。

この対面実務研修の最後のコマには、認定インストラクターとなった上での今後の方針を論議するセッションがありました。学んだことを地域に返す、実践する計画を建てるセッションです。

修了者の内12名が新潟市内在勤・在住の支援者であったことから、まず新潟市での実践が提案され、当初よりその計画を懐に入れて参加していた受講者の一人より新潟市西区を会場にして秋から開始しよう、との具体的な提案が行われました。

この日から、秋からのプログラム実施に向けての準備が開始された訳です。

まず最初はKeepSafe受講対象者を確定する作業です。かねてより、このプログラムを待ち望んでいたリスクを抱えている障がい当事者6名の本人・家族にお誘いをかけました。

残念ながら、内1名はこのプログラムが始まる前に再度触法行為を行ってしまい、受刑してしまったため、最終的に5名で実施する事になりました。

並行して基幹相談支援センター全体の業務(公務)として、このプログラムを主体的に担う為に、行政・関係機関との擦り合わせを行いました。毎週水曜日午前中2時間・全38回のセッションです。しかも、年度を跨いでの実施となります。この下準備作業は正直、想像以上に大変でした。しかし、最終的には基幹相談支援センター・地域生活定着支援センター双方の公務として、この事業を担う事の確認が得られることとなりました。会場も基幹相談支援センターの公務として区役所会議室を借用させていただけることになりました。

このことは、2017年の新潟ソトセック講座の取組みを皮切りに、セルフアドボカシー支援＝「犯罪に巻き込まれてないための本人との学び」啓発活動を、一貫して発展・啓発・継続してきた日常活動があった故かと考えています。

かくして2020年秋のプログラム開催に向けての下拵えが整った2020年7/12(日)には、満を辞して準備会議が、開催されます。集まったのは、基幹相談支援センターと地域生活定着支援センターのコアメンバー5名と、インストラクター役となるKeepS

afe Japan 代表の堀江先生と高岸副代表。

この作戦会議において、下記の全体プログラムと、セッション 10 回毎（合計 4 回）のインストラクターを交えたスタッフ打合せの予定が決定されました。下記がその全容になります。



〈ZOOM でプロジェクター投影受講〉

~~~~~

## KEEPSAFE 長期コース新潟

全体スケジュール

本人セッション 全 38 回

保護者セッション 全 16 回

期間：2020 年 10/21～2021 年 7/21、  
2020 年

9/25(金)第 1 回スタッフ全員打合せ①

第 1 回目セッション準備の共有、  
参加メンバーの概要紹介

10/18(日)スタッフ担当者打合せ②

2 回目～10 回目までの展開案の確  
認（モデルセッション 30 分ず  
つ）と全体で教材づくり

\*セッションは毎週水曜日 10:00～12:00

\*保護者セッション⇒保護者 S※同時間内

モジュール 1. keep-safe とは何か？

①10/21 歓迎と導入、グループルール

保護者 S①：倫理説明

②10/28 私たちのグループを知ろう

③11/4 グッドライフモデル導入

④11/11 グッドライフ・グッドサイド・グッ  
ドウェイ

保護者 S②：対人関係と境界

モジュール 2. 成長：関係性、性的関係、境界

⑤11/18 私たちの体

⑥11/25 成長

⑦12/2 友達・家族・恋人

保護者 S③：監督と性

⑧12/9 恋人同士の関係

⑨12/16 モジュールの復習

保護者 S④：ピア関係性、境界と性 1

12/20(日)スタッフ担当者打合せ③

11 回目～20 回目までの展開案の  
確認（モデルセッション 30 分  
ずつ）と全体で教材づくり

⑩12/23 同意

2021 年

⑪1/6 よいタッチと悪いタッチ. その結末

保護者 S⑤：ピア関係性、境界と性 2

⑫1/13 性行為. 避妊. 性感染

⑬1/20 ソーシャルメディア. ネット. 同調圧力

保護者 S⑥：性教育と感情コントロール

⑭1/27 ソーシャルメディア. ネット. 同調圧力の結末

モジュール 3. 感情と感情コントロール

⑮2/3 どんな気持ち

保護者 S⑦：感情コントロール

⑯2/10 感情と私たちの体

⑰2/17 思考と感情を関連付. 衝動コントロール

保護者 S⑧：行動コントロール

⑱2/24 思考と感情と行動関連付

⑲3/3 責任者は誰？自分か感情か？

保護者 S⑨：グッドウェイモデル

3/7(日)スタッフ担当者打合せ④

21 回目～30 回目までの展開案の確  
認（モデルセッション 30分ずつ）  
と全体で教材づくり

⑳3/10 私のクールダウン法

モジュール4. 自分の行動を理解する

㉑3/17 グッドウェイモデル、G・Bサイド再考  
保護者 S⑩：自分の行動を理解

㉒3/24 3人の悪者紹介

㉓3/31 3人悪者と私の性問題行動

㉔4/7 3人悪者言い訳  
保護者 S⑪：行動の理解2

㉕4/14 3人の賢者紹介

㉖4/21 自分のグッドサイドを育てる

モジュール5. 共感、(他者の)尊厳, その結果

㉗4/28 感情と共感  
保護者 S⑫：共感の理解

㉘5/12 共感について理解する

㉙5/19 性問題行動の結末とその影響  
保護者 S⑬：共感理解と謝罪

㊱5/26 性問題行動の結末と謝罪の手紙

㊲6/2 謝罪する理由と復習

㊳6/9 謝罪の手紙  
保護者 S⑭：謝罪手紙と称賛手紙

モジュール6. 私のキープセーフ計画・前に進む準備

㊴6/16 私のグッドライフを組み立て

㊵6/23 古い人生と新しい人生1  
保護者 S⑮：振り返りと新たな始まり

㊶6/30 古い人生と新しい人生2

㊷7/7 私のキープセーフ計画と工具箱1

㊸7/14 私のキープセーフ計画と工具箱2

㊹7/21 振り返りと終了  
保護者 S⑯：振り返りと新たな始まり2

~~~~~  
この原稿作成時は、本人セッション
13回目・保護者セッション5回目を
終えた所ですので、折り返し地点どこ

ろか、やっと全体の1/3。登山に例え
れば3合目という所でしょうか・・・。

この間、大雪での交通障害や参加メ
ンバーそれぞれの個別事情（1名の再
犯での逮捕—釈放等も）等、やむを得
ない事情での欠席はありましたが、そ
れを除けばなんとか5名全員が継続
参加してくれています。

徐々にではありますが、お互いを学
ぶ仲間として認識し始めてきており、
それぞれのメンバーなりにこのセッ
ションに向き合ってきて来てくれている
事を実感出来る様になってきました。

先日の保護者セッションでご家族
の方から『先日、子ども(参加メンバ
ー)の前で夫婦喧嘩をしてしまったら、
子どもに「父ちゃんも母ちゃんも、マ
インドフルネス(瞑想)※でもでもした
ら・・・』と言われ、ビックリしまし
た。そんなこと初めてだったので・・・』
と嬉しいエピソードを披露してくれ
ました。

※セッションの最後に必ず行うチルア
クティビティの一つで、落ち着きを取
り戻す為のスキルの一つ

残りの25回も、1回1回のセッ
ションを大事に、このプログラムの目的
である「知的・発達障害のある人の性
問題行動と危機支援のためのグッド
ウェイ・モデルに基づく構造化された
長期介入」を、少しずつ少しずつ新し
い学びと自分を守るスキルを積み上
げていく作業を一緒に取り組んでい
きたいと思います。

今後の課題

「障がい当事者のセルフアドボカシー

支援」の活動は、まさに始まったばかりです。その目的は、ずばり犯罪に巻き込まれないための「地域づくり」。新潟では、この3年間、様々な場所で、様々な方々に、その“種蒔き”をさせていただきました。

次の段階は、“発芽支援”であり、“育苗”です。より多くの場所（事業所・学校）で、「セルフアドボカシー支援活動」を実践できる支援者とそのステージを増やしていく、これをこれからの課題と考えています。

昨年新潟市では沢山の場所で展開してきた「暮らしのルールブック活用講座」の問題点、課題が指摘される様になってきている様です。どんな支援ツールも「銃の使い方」と同じで、使い方次第で薬にも毒になる危険性を内包しているでしょう。

その上で大事にしたいのは次の事。

「集団における個人の行動や思考・価値観等は、集団から影響を受け、また逆に、集団に対しても影響を与えるというような、集団を構成する個人同士の相互依存関係から派生する効果を求めるグループ支援と、緊急性や常習性など個別でのセッションが必要な場合のマンツーマンでの支援、この2つを組み合わせ、ケースバイケースで支援していくことが大事」であること。そして、いずれにも共通しているのは「自尊心を高めること」ことだということ。「解決策がわかった」「他人にアドバイスできる」「できそうだ」という理解や役に立つ経験・可能性」を体感してもらう事を意識し続ける必要があります。

つまり、この講座を行う(広める)上で大事な事は、「暮らしのルールブック」に載っているような犯罪や危ない行為を、単に「これをしてはダメ」と教える講座ではないという事を特に理解する必要があるという事です。大事なことは、当事者が「自分が楽しく生きていく(グッドウエイ・グッドライフ)ために守ること」に気づき、それを守るためのスキルを身につけ、進んで実践し、信頼できる人に必要な援助を求めることができるようになることです。

そして、この講座活動を通じて、支援者・保護者の「これまでの当事者への眼差し」を更新し、当事者の可能性や課題を新たに発見することで、これまでの個別支援計画を見直し、個別安全計画を組み込んだ支援に発展させる契機を作り出すことが大事なんだという事です。

先述した様に、昨年、新潟市内の地域活動支援センターで毎月2回障がい当事者との勉強会を続け、計15回の学習会を重ねました。今年は、KeepSafe長期コースで1年間の学びを継続中です。

ここでは、支援する人・される人という硬直した関係性にはならない様、特に気を配って展開してきました。それが、この勉強会や講座を、単に「やっつてはダメな事を教え込まれる場」ではなく、主体的に楽しみに参加し続けててくれる所以なのではないかと考えています。

日頃、障がい福祉サービスを利用して、支援する人される人という関係の中で、この場面では、一緒に考えるメンバー（スタッフ職員も参加者）になるからです。

この立脚点を大事にし、これからもセルフアドボカシー支援活動を、KeepSafe長期コースを続けていきたいと思えます。

これからも、新潟の支援者は頑張ります。全国の皆さん、一緒に歩みましょう！

(文責：新潟TS@竹田一光)

生きづらさを抱える知的発達症の人たちの生涯学習支援のために

～委託研究から学んだもの～

平井 威

明星大学客員教授、明治大学兼任講師、
非営利活動法人 Ohana 理事、多摩トラブルシューター・ネットワーク

非営利活動法人 PandA-J（代表理事：堀江まゆみ白梅学園大学教授）による文部科学省委託研究事業「セルフアドボカシー支援に向けた学習プログラムに関する取組」に関わらせていただき、私の学んだことをいくつか述べる。

1. 特別支援教育×矯正教育×治療教育＝？生涯学習¹

「適応のための」学びの場

対人トラブルや触法行為のリスクなど様々な生きづらさを抱えるようになったライフステージにいる知的発達症の人たちを対象とした効果的な学習はどうあるべきか検討し、自分で自分を守る（セルフ・アドボカシー）ための問題解決スキルを獲得するプログラム開発が必要だと考えた。

そのためには特別支援教育、矯正教育、治療教育から学び、これらの知見を串刺ししたような方法が求められた。

特別支援教育は、障害のある人の自立や社会参加に向けて生活や学習上の困難を改善又は克服するために行う指導と支援から成り立っている。

矯正教育とは犯罪や非行のような社会的不適応を示す者を矯正し社会に復帰させる教育であり、少年院法に基づいた教育を「矯正教育」、刑事施設においては「矯正指導」、少年鑑別所では「健全育成のための支援」などと狭義には分かれているが、ここでは「誤った行動を正常に導く教育」程度に考えておこう。

治療教育というものもある。こちらは「精神医学や心理学などの科学的知見に基づき、教育的手段を用いて、精神機能の障害や行動の異常を改善するように働きかけたり、精神発達や適応行動を促進したりする方法²」だとされている。精神科治療の一環として行われるので、1対1や少人数グループの形態で行われることが多く、上の二つの教育とは様子はかなり違う。

しかしこれら三様の学びは、その目的ではかなりの共通性がある。どれも「障害や行動の異常を改善する」ことであり「社会に適応した人を作ること」である。

「主体的な学び」としての生涯学習

これに対して、生涯学習は、学校や施設、病院などのある種の制度と権力構造をもつ“場”で提供される知ではなく、自らの要求に基づき、「いつでも、どこでも、だれとでも学ぶ」こととしてとらえられている。生涯学習の源流となった社会教育や成人教育は、学校など制度的教育から疎外された人々のための自己教育運動として発展し、権利としての学習という普遍的観念を生み出した。

ユネスコ「学習権宣言」(1985)では、「学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的・集団的力量を発達させる権利である」とされ、さらに1996年のドロール・レポートで Learning to know, to do, to live together & to be (知ることを学ぶ、為すことを学ぶ、共に生きることを学ぶ、人として生きることを学ぶ)とその目的が謳われている。ここに貫かれている思想は、学習者の主体的な学びである。そして今日、小学校教育は生涯にわたり学習する基盤を培うものと位置付けられ、どの学校でも「主体的・対話的で深い学び」が求められている

文部科学省が推進する障害者生涯学習においても、障害者の主体的な学びによって彼らの個性や得意分野を生かした社会参加の実現が可能となるという立場である³。

「適応のための」学びと生涯学習、この両者は両立可能だろうか？

2. 特殊教育からの脱皮－特別支援教育の生涯学習化、刑務所処遇の矯正教育化 通常の学校教育との連続性に配慮した新しい特別支援学校学習指導要領

平成29年の特別支援学校学習指導要領における知的障害者である児童生徒を教育する特別支援学校の各教科等の改訂は、これまで別建てで示してきた知的障害者向けの各教科の目標及び内容の示し方を大きく方向転換したものとなった。

それは(通常の)小学校等との各教科の目標や内容の連続性・関連性を整理し、充実・改善を図るねらいのもとに「小学校等の各教科等との内容構成を概ね同じにしたり、各段階の目標の系統性や内容の連続性について小学校等の内容を参考に充実したり、関連を分かりやすくし目標及び内容の系統性を整理した⁴」ものである。このことは「内容の範囲は従前のものに概ね基づく」と断ったり生活単元学習などの「各教科等をあわせた指導」を依然として採用したりしていることから旧要領との違いが目立ちにくくなっているが、これまでの「特殊な学び」としての知的障害者向け教科等から大きく脱皮した記述になっていることに注目したい。念のため申し添えれば、このことがかつて「水増し教科」と揶揄された知的障害教育への回帰になる危惧もあるが、そうしないためには、この教育を担う教員の資質能力の向上と、人の認知機能・知的活動の発達研究に則った系統的な教科学習いわば「歩きはじめの各教科⁵」の創造が求められている。

特別支援教育の生涯学習化

同時に新しい学習指導要領では、インクルーシヴ教育システムの推進により障害のある子供たちの学びの場の柔軟な選択を踏まえ、幼稚園、小・中、高等学校の教育課程との連続性を重視するために、自立と社会参加に向けた教育の充実の観点から「生涯を通して主体的に学んだり、スポーツや文化に親しんだりして、自らの人生をよりよくしていく態度の育成を規定」した。平成29年文部科学大臣が発した「特別支援教育の生涯学習化」の学習指導要領への反映である。

従来の特殊教育から特別支援教育への転換が、その対象と場の拡大⁶にとどまらず内容においても目指されるようになったと理解できる。

塀の中の模索

他方、矯正の現場でも変化が進んでいる。2007年刑事収容施設及び被収容者の処遇に関する法律

(旧監獄法) 施行によって刑務所の役割は「改善更生の意欲の喚起及び社会生活に適応する能力の育成を図ることを旨として行う」ことが受刑者処遇の原則とされた。

例えば初犯者を受け入れる PFI 刑務所では、ビジネススキルや PC スキル、介護や理容の専門資格習得などのプログラムを用意し受刑者の社会復帰支援を図っている。また刑務作業だけでなく様々な改善指導を実施している。特に薬物や繰り返す窃盗、性犯罪などに対する特別改善指導では認知行動療法などの心理教育プログラムを取り入れている。

ここでは R3 と称される性犯罪者を対象とした特別改善指導の中でも知的制約などにより回数を増やしたりビジュアルな要素を多用したりする「調整プログラム」について、そのプログラム実施に 10 数年間携わってきた担当教育専門官等の著書⁷及び講演内容⁸から、そのコンセプト並びに当事者理解について紹介する。受刑者向け改善指導であるが、依ってたつ臨床理論は認知行動療法などの心理療法でありその実施者は臨床心理士等であることから、そこに貫かれているのはクライアント中心主義＝当事者の尊重である。しかしプログラム担当者は、当事者の犯罪歴やプログラム参加中の不適切な態度に出会い、自身の心に去来する嫌悪感とセラピストとしてのスタンスの狭間で苦悩することもあったと言う。プログラムの基礎となったカナダの William L. Marshall 博士に直接教えられた、「良い担当者の特徴は、暖かさ、共感、励ますこと、ガイダンスの提供。良いグループの特徴は、凝集性（支持的・相互尊敬）、表現性（話すこと、感情的自由）にある」を信じ、根気よく接する中で当事者の変化を認めることもできたと言う。

そうした経験から効果的な関わり方として「褒める、共感する、暖かく接する、見通しを持たせる、励ます」ことが大切であり、その眼差しは「本当のあなたのままだ良いと言う人生への共感と小さな変化への気づき」であり、そこから「自律性＝やらされることより自らやることの育成、すでにある自分の受容と感情を表現する自由の獲得」が目標となると述べている。

堀の中と社会をつなぐ、そもそも堀の中に入れない取組

しかし、このようなプログラムだけでは社会復帰は果たせない。社会の側の受け入れとそれを繋ぐ支援が不可欠である。特に累犯で満期出所となるような人たちには、障害が見過ごされていて必要とする福祉の支援を受けてこなかった高齢者、障害者や、帰る先を確保できないまま矯正施設を退所する人が数多くいる。そこで厚生労働省は、2011 年度末、このような人を福祉につなげるため、保護観察所と協働して進める「地域生活定着支援センター」を全都道府県に開設し、退所後のフォローアップや相談支援を強化し、入所中から退所後まで一貫した相談支援を行う事業を実施している。

さらに、「そもそも軽微な犯罪で何度も刑務所に入る意味があるのか、必要なのは刑罰より福祉ではないか」と言う問いかけから、刑事司法の入口の段階で、司法関係者（検察や弁護士）と社会福祉士など福祉関係者が連携して、被疑者のアセスメントをしたり今後の住居・生計など必要な支援を探り出したりして更生支援計画を立案し、不起訴処分や刑の軽減・社会内処遇の必要性を主張したり、必要な福祉的支援を作り出したりする取り組みも見られるようになった⁹。

3. 開発しようとした“セルフアドボカシー支援に向けた学習プログラム”の特徴 社会適応上の課題がある人のために

私たちが開発しようとした学習プログラムは、社会に出てから、会社の同僚や上司との関係がうまく取れず、就労を維持できなかつたり、近隣の住民との関係がこじれて地域のつながりが途切れてしまったり、異性との付き合いがこじれたり、性問題や様々なトラブルに巻き込まれてしまったりするリスクのある知的・発達障害のある人を対象にしたものである。とりわけ他人を傷つけ罪を犯してしまうリスクのある人を想定している。

このような人には、障害による生活や学習上の困難があり、社会適応上の課題があり、これまでに身に付けてしまった誤った思考や行動パターンを改善し適応行動を促進する必要があると考えられた。

英国の Keep Safe(ySOTSEC-ID)から学んで

その際、PandA-J が 10 年ほど以前から培ってきた地域におけるトラブルシューター・ネットワークを活用しつつ、“性問題行動を有する青少年と保護者に向けたグループ学習プログラム（英国ケント大学 R. Rossiter 博士との共同研究）Keep Safe(ySOTSEC-ID)” をベースとした。

“Keep Safe(ySOTSEC-ID)” は、知的障害のある青少年の性問題行動への早期介入が重要であるとの認識から、SOTSEC-ID¹⁰の経験を活かしつつ、当事者グループの意見を取り入れ、ニュージーランド WellStop (<http://www.wellstop.org.nz/>) の GoodWay モデルや仮想キャラクターを通してのナラティブ・アプローチに基づく青少年向けのプログラムとして開発された。ビジュアル教材やロールプレイ、チル・アクティビティの多用と繰り返しや個人の理解レベルに応じた学習スタイルを導入し、12 歳～25 歳程度、IQ40 台にも対応できるプログラムである。週 1 回 2 時間の当事者向けのプログラム（6 モジュール 38 セッション）と保護者・支援者向けプログラム 16 セッションを組み込んでいる。認知行動療法にもとづく構造化された長期介入治療的教育プログラムである。このプログラムは、性問題行動が嗜癖的なレベルにまで達している高リスク群にも対応できるプログラムとして開発されている。

グッドウエイ・モデルの汎化

しかし性問題行動だけでなく、そのほかのトラブルやリスクのある当事者への介入プログラムも必要であり、また、リスクはあるが未だ犯罪やトラブルを起こしていない当事者向けの、数回で完結することも可能なプログラムへのニーズもある。WellStop の L. Ayland によれば、GoodWay モデルにはもともと、次のような特徴があった。①ニーズ対応：個人のニーズに合わせたプログラム、②生物心理社会モデルの介入：社会的および文化的背景を考慮し生活まるごと捉える、③発達のアプローチ：トラウマ、虐待、ネグレクトにも対処、④責任主体：当事者は、他人の虐待や危害に対する責任がある、⑤ストレングス基盤：当事者、家族、システムの強みを重視、⑥汎用性：定型発達の子供や若者にも使用可能、知的障害のある成人にも適応可能。

このことから、充実した生活へのニーズ、障害特性への配慮、リスクに対応する地域資源のコンディショニングなど相乗的にアセスメントし、それぞれに応じた汎リスク対応型学習プログラム“キープセーフ FC（フォー・チェンジ）”が構想された。

これは、当初の実践研究「暮らしのルールブック¹¹」活用によるセルフアドボカシー講座の成果と問題点を整理しつつ、“Keep Safe”のグッドウエイ拡張モデルとナラティブ・アプローチに基づき知的発達に制約のある若者が起こしがちな日常生活でのちょっとしたトラブル（ステージ 1）か

ら社会生活上の対人トラブル（ステージ2）、人生を左右するような触法トラブル（ステージ3）までをカバーする共通のコンセプトとアイテムを用いたプログラムである。

「暮らしのルールブック」活用によるセルフアドボカシー講座の経験から、そもそも生きづらさを抱えていても犯罪やトラブルを起こさない人もいるが、そういう人もこれまでの日常の中で、1) 人に言われた事には従う(迎合性) 2) ダメだと言われたら、考えなくなる・相談しなくなる(思考の一時停止) 3) 誰にもわからなかったら「これくらいしてもいいだろう」(行為の隠蔽)とやってしまうなどの潜在的リスクが培われている場合は多いことがわかった。こうしたリスクを低減するためには、1)自分の行動は自分で決める権利と責任があること、2)人には良い考え、悪い考え、両方ある。どちらも一人の人の中にあることを認め、どれを選ぶかはよく考え、信頼する人に相談して決めると良い結末が起こることが多い、3)行為行動の前には、一度立ち止まって冷静になり、その行動は正直かどうか、他の人のためになるか確かめて決めること、の3点を繰り返し経験することが有効である。

行動を理解する-分かれ道の選択

このことから、“Keep Safe(ySOTSEC-ID)” プログラムモジュール4「行動を理解する」のロールプレイ「分かれ道に立つ男への3人の悪者と3人の賢者のせめぎあい」を共通の中心的アクションとする学習プログラムとした。

当事者は直接に自分の問題に向き合うのではなく、賢者となって自分の分身であるアバター（任意に名付ける）にアドバイスするワークを通じて学習していく構造、「働きかける者が働きかけられる」教育学原則にもとづくワークとロールプレイングを重視する。

そして、自分の安全を守るためのスキルを詰め込んだ「私の道具箱」と、自分を取り囲む支援者たちとの「信頼の人垣」を築いて「グッドライフ・プラン」を作る。

このようなコンセプトに基づき、参加する当事者と関わる支援者のリスク・ニーズ・コンディションに応じて3回から数十回まで取り組めるものとしたと考えた。

第一ステージ《暮らしの中の選択と自分で決める、を考える》では、1 歯磨きしたくない・・

2 部屋掃除面倒くさい・・3 ダイエット中なのにケーキ食べたい・・4 夜中だけゲームし続けたい・・5 まだいっぱい入っている飲みかけの缶コーヒーを拾った・・・など。

第二ステージ《小さなトラブルでの岐路と意思決定ができる》では、6 長蛇のバス停横入りしようかな・・7 ドアが閉まりそうな電車飛び乗ろう・・8 雨の日自転車片手乗りして傘さそう・・9 友人にお金貸してと言われた・・10 同僚にアドレス教えてとんでもお願いする・・など。

第三ステージ《犯罪リスクのあるトラブルを回避するために》では、11 道端の邪魔な看板、蹴っ飛ばしたい・・・12 誰もいないローカールームに財布があった・・・13 気に入らない店員のいるお店の悪口を SNS で広げたい・・・14 可愛い子どもに触ってみたい・・15 「きれい」と言われたけど毎日待ち伏せしている・・などの「分かれ道課題」が考えられるが、当事者の経験とニーズに応じて、当事者と共に設定することが望ましい。

主張する当事者-多摩と石狩の試みから

多摩 TS セッションで当事者自らが設定した課題には、①「水筒を持っているのにコーラを買おうとした」(第一ステージの課題) や②「グループホームの隣室の人が勝手に部屋に入ってくるの

でイライラして怒鳴りたくなかった」(第二ステージの課題)が出された。②のシチュエーションを「分かれ道課題」として展開したセッションでは、“Keep Safe(ySOTSEC-ID)”プログラムにある「波紋の広がり」という概念を示して、バッドサイドの意見(隣人に怒鳴って追い出してしまう)に従った時とグッドサイドの意見(相手の気持ちを一旦は受け入れたうえで、今は入らないで欲しいと伝える)に従った時とでは後に何が起こるか、その波紋の広がりの違いを当事者とともに考えた。

はじめは身近な支援者に勧められて参加してきたメンバーだが、回を重ねるごとに「次はいつありますか?」「今度は～したいな」とセッションを期待したり取り上げるテーマを提案したりするようになってきたことに、「適応のための」学びにも当事者の主体性が育ってきたことがうかがえた。

石狩 TS セッションでは、職場や仲間とのコミュニケーションについて学びたいという当事者の意見から「ふわふわことばとチクチクことば」というタイトルでコミュニケーショントラブルの予防に向けた学習会を展開した。仲間とのコミュニケーションでは、「電話を掛けた方は一方的に自分の話を始めたので相手がイライラする」という「分かれ道課題」を設定し、どのように対応するのが良いか考えあった。

石狩 TS セッションに参加したメンバーは、「大地の会」という当事者会役員たちであった。毎年自分たちの要望をまとめ市長との懇談会も開催している石狩地区障害者運動の担い手でもある。キープセーフ FC で想定した課題よりも自分たちに切実なコミュニケーション課題を積極的に提案したり使用する画像やキャラクターの良し悪しを評価したりしてくれた。はじめから共同研究者というスタンスと意識で参画していた。

4. セッション FT 実践からわかったこと

認知行動療法について

開発プログラムの精神療法的基礎は認知行動療法(CBT)である。抑うつや不安などの感情障害に適応されてきた認知療法と恐怖症や各種依存症における観察可能な不適応行動を治療対象としてきた行動療法とを合体させたこの方法は、今日ではヨガや禅の考え方や方法も取り入れた「第三世代のアプローチ」アクセプタンス&コミットメントセラピー(ACT)へと変化してきている¹²。

これは、従来の認知(自動思考)の組み替えと行動変容へのアプローチだけでなく、無意識による思考と行動の制約・不適応に対応するための気づきと受容を引き出すマインドフルネスなアプローチを重視あるいは先行させる方法である¹³。

“Keep Safe(ySOTSEC-ID)”プログラムにも、感情を鎮静化し醒めた思考と行動を呼び起こすためのチルススキル(多摩 TS ではこれをクールアイテムと紹介した)を身に付けるためのエクササイズがたくさん含まれていた。呼吸法、筋緊張・弛緩法、瞑想、リラクゼーション、ヒーリング、ビジュアライゼーションなどを手軽にできるスマホアプリも用意されている昨今である。自分にあつた方法を使って「今、この瞬間」に集中し、強い感情から逃れて心理的柔軟性を取り戻すプロセスは認知行動療法を軌道に乗せる前提である。

ところで ACT は、これまで力動的心理療法が扱ってきた無意識へのアプローチを行動療法の中に取り込んだものと解釈することもできる。無意識を抑圧された記憶であるとフロイドは考えたが、

今日の神経科学はそれを潜在記憶と呼んでいる。潜在記憶は脳の新皮質・線条体・扁桃体・小脳および反射経路などに貯蔵され、意識される顕在記憶とは別の脳（神経回路）にあることが分かっている¹⁴。そして意識との調和的作動を外れて無意識がヒトの行動を支配する局面もある。「思わずやってしまった」「気づいたときはやってしまった後だった」というような場合である。意識と神経発火の間に平均 0.35 秒のタイムラグがあり、意識的判断より先に行動を引き起こす神経活動が生じている¹⁵ことから考えると、上記の言い訳はあながち嘘ではない。

意識的判断を理性的・適応的な行動選択であるとする、無意識に生じた行動が理性的・適応的でなかった場合は、意識と無意識との不調和が生じていると考えることができる。

私たちが日常的に理解し駆使している学習理論では、無意識（潜在記憶）に理性的・適応的でない行動が貯蔵されているということは、そうした行動を誘発する経験を人生のどこかで経験し学び記憶していると考えられる。そうであるなら、こうした経験と学びを新たな経験と学びで更新し記憶を書き換えることが必要だろう。

このことに気づかせ、行動を変えるきっかけを与えるのが、認知行動療法（CBT）であるといえよう。私の理解した認知行動療法（CBT）とはこのようなことである。

セッションを進める技法について

以下この技法を巡るいくつかのポイントを箇条書きしておきたい。

1) 認知行動療法における様々な技法は、学校教育における生徒指導と基本的に共通である。なぜならどちらも人間の行動・感情・思考の変容に関する心理学的基礎・学習理論を同じくしているからである。学校における生徒指導が、学校規則への適応だけを求める偏った指導になるとき失敗するように、認知行動療法の目的を性急な社会適応に求めてもうまくいかない。

2) 集団認知行動療法については、並行的作用や反映、相互干渉、波及効果、凝集性などグループダイナミクスや集団教育学の知見を活用し、注意深くメンバーの動静を見極めたり、学習効果を上げたりする手立て、特にファシリテーターの協働が大切である。

3) 構造化された長期介入プログラムであっても、1回1回のセッションでは、ブリーフセラピック¹⁶な関りを大事にする。つまり対象者とFTとの間にラポール（信頼）の形成、ペーシング（合わせる）&リーディング（導く）、リソース（強み）発見などがあって、「楽しかった」「また来たい」と思わせる契機があること。

4) FTの価値の押し付け、語りすぎ、極端な脱線は禁物である。対象者の拒否・隠ぺい（そんなこと聞きたくない、知らないふり）、黙従・迎合（よくわからないけど同調しておけば事無くすぎる）、飽和・思考停止（頭がいっぱいで考えられない）などを引き出してしまうと効果はなくなる。

6) 対象者との問答は「ソクラテス・トーク」となるよう心がけ、考える機会、これまでの自動思考の変更への契機を与えることが肝要。認知行動療法における「ソクラテス・トーク」とは、相手の論理矛盾を突く論争技法ではなく、新しい情報に目を向けさせこれまでの認知を組み替え新しい認知的枠組みに統合することを目的に対話することである。正解を与えるための問答ではなく、相手の「気づき」を促す質問が大事。丁々発止のやり取りは反射的な言葉の交通になり、考えて言葉を選んでない場合もあるので要注意。

例：でも、こういう考えもあるがどう思う？ 反対の見方もあるけどそれは何だろう？ あなただ

ったらどうする？ ～さんだったらどうすると思う？ どっちが良いと思う？ もっと良い方法は？ こっちも悪くないのでは？

回答が倫理行動的に正しいかどうかを評価するのではなく、自分で考えて回答したことをほめること。倫理行動的に間違った回答をしたときは、「よく考えていつてくれたね。えらい！でも、そうすると～となるかもね」と悪い結末となることを示唆する程度で良い。

5. グッドウエイのために - ネットワーク支援「信頼の人垣」の必要性

希望・受容・愛他

ヤーロムによれば、トラブルを起こしたり罪に問われたりしがちな人が、自分の問題と向き合い真っ当な生き方を選択するようになるためには少なくとも次の3点が前提である¹⁷。

- 1) 自分にも豊かな人生が切り開けると言う「将来への希望」
- 2) ありのままの自分が他人に受け入れられるという「受容的体験」
- 3) 誰かの役に立ち誰かに喜ばれるという「愛他的体験」

こうした前提があってはじめて問題を改善するための具体的スキルを身につける努力が続くという。しかし考えてみるとフツーに生活していると思われる人々にもこれらの希望と体験すべてを満たすことは困難かもしれない。だからこそ、グッドウエイ・モデルは、普遍的な意義があるともいえる。特に思春期は、自分自身の心身の変化成長と将来への希望と受容的・愛他的体験希求との間で模索・動揺する時期でもある。なかでも他者との性を含む関係性をどう構築していくかは重要なテーマだ。心理的社会的自立の遅れがちな知的障害者は、このような模索・動揺時期が長期にわたることがあるだろう。

同意と境界

社会適応的に他者との性を含む関係性の構築のためには、同意と境界の理解が不可欠である。

相手の同意なく相手の領域に踏み込んで勝手なふるまいをすることには、金銭を持ち出し使うことや身体に暴行することなど様々あろうが、共通しているのは「同意なき境界侵犯」である。それは自分の子どもの身体を弄ぶことや過度な勉学を強いる心理的圧力から他国領土への侵攻までカバーできる概念だと思う。私は「同意と境界」の理解こそ人の道徳性の基礎だと考えている。そのために人はこの二つを成長の過程で体得する必要がある。

同意＝自己決定が尊重される生活⇒「良い＝OK、ダメ＝Not OK」の意思表示ができて、それを認められること。

境界＝他から侵害されない領域の保障⇒プライベートな空間と自身の不可侵性の保障、パブリックな公共空間とパブリックな交わり方の理解

この「同意と境界」を体験的に保障されてこなかった代表格が被虐待児である。多くの知的障害者もその成育歴の中で“自己決定”と自分の“侵されない境界”とを尊重されてこなかった可能性がある。だからこそ「同意と境界」の教育は彼らの履歴に刻まれた被虐待体験とそれでも生き抜いてきた存在そのものへ敬意をはらうことが出発点である。

「同意と境界」の理解は“Keep Safe(ySOTSEC-ID)”プログラムモジュール2の主要な要素だが、人間関係や社会関係を考える際のキー概念としてより汎化すべきだと考える。

また、ヤーロムの言う3つの前提を保障する上でも先ずはこの「同意と境界」を押さえておくことは実践的に重要だと思われる。

しかし、3つの前提体験は一ター朝に実現できるわけではない。敬意を伴う支持的共感的まなざしのもとで伴奏してくれる支援者に囲まれ守られて生活する中で徐々に体感できるのではないだろうか。

物質使用障害治療プログラム SMARPP¹⁸を開発した松本俊彦氏は、認知行動療法プログラムの効果についてプログラムの情報自体ではなく、「何が効果的かというとおそらくそれは『人とのつながり』です。プログラムを口実として、リアルな出会いと人とのつながりを作ること¹⁹」の意義を強調している。

そうした人とのつながりに囲まれる状態を「信頼の人垣」と名付けてみた。そのために、キープセーフFCにせよ“Keep Safe(ySOTSEC-ID)”プログラムにせよ、地域のトラブルシューター・ネットワーク(TS)基盤の中で「信頼の人垣」を作る必要があると考えた。

より強固な枠組みとセルフアドボカシー支援

薬物依存者や精神障害者が、マック・ダルク、当事者研究のような当事者セルフヘルプグループ、あるいはアミティなどの治療共同体²⁰を必要とする根拠は、その回復・治療の難しさにある。嗜癖的行動にまで定着した問題傾向は、性問題であれ盗癖や暴力であれ、相当長期にわたる離脱のための期間と仲間の支えや省察と学習の機会が必要になる。

そうであるならこうした傾向と知的障害を重複している当事者への支援はさらに強力な枠組みが必要であろう。(社福)南高愛隣会雲仙「あいりん」と「さつき」の就労支援と自立訓練、グループホームを組み合わせた展開²¹、(株)埼玉福興のソーシャルファームとグループホームを組み合わせた展開²²、多機能型事業所えぞネットと札幌医療法人社団ほっとステーションの精神科医療とを組み合わせた展開²³など、“更福・農福・医福連携”の先駆的实践から学び、セルフアドボカシー支援のより強固な在り方を模索することが課題である。

1 この並びでは「生涯教育」とする方が語感的にも意味的にも適切だと思われるが、概念の煩雑さをさけるために本稿では生涯学習とする。なお昭和62年臨教審答申によれば生涯学習には学校教育・社会教育・家庭教育が内包され、学習者の視点に立った立場の明確さという点から生涯教育ではなく生涯学習という語を用いたとのことである。

2 東京大学病院心の発達診療部による説明 <http://kokoro.umin.jp/autism/3-3.html>

3 有識者会議(2019)障害者の生涯学習の推進方策について—誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して—(報告)

4 文部科学省編 特別支援学校学習指導要領解説各教科編(小学校・中学校)第4章第3節2各教科等の内容の改訂について(38P)

5 遠山啓と八王子養護学校による共同研究(1972年)で生まれた「歩きはじめの算数」「原教科」という発想のアナロジー。実際、特別支援学校新学習指導要領知的障害算数科の内容は、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領との大きな落差を埋める中間項的な「さんすう基礎」と呼べるものとなっている。

6 2007年4月1日施行の学校教育法一部改正による特別支援教育の開始。対象とは、従来の身体障害、知的障害に発達障害を加えたこと。場とは特別支援学校や特別支援学級だけでなく、特別な

支援が必要な児童生徒が在籍するすべての学校に広げたこと。

7 門本泉・嶋田洋徳編著 (2017) 性犯罪者の治療的・教育的アプローチ 金剛出版

8 多摩トラブルシューター・ネットワークが実施した 2019 年秋のセミナーでの講演

9 東京 TS ネット <https://tokyo-ts.net> などが活動している

10 英国版も日本語版も未出版であるが、内山登紀夫編集 (2017) 発達障害の支援の実際-診断の基本から多様な困難事例への対応まで 医学書院 P180~184 で概要が紹介されている。

11 共生社会を創る愛の基金編 (2017) 暮らしのルールブック-楽しく生きていくために守ること 社会福祉法人南高愛隣会

12 熊野宏昭著 (2012) 新世代の認知行動療法 日本評論社

13 スティーブン・C・ヘイズ他著 武藤崇他監訳 (2014) アクセプトランス&コミットメント・セラピー (ACT) 第 2 版 星和書店

14 Eric R.Kandel 他著 金澤一郎他日本語監修 カンデル神経科学(P1346~1360、P1427~1453) メディカル・サイエンス・インターナショナル

15 ベンジャミン・リベット著 下條伸輔訳 (2004) マインド・タイム-脳と意識の時間 岩波書店

16 ブリーフセラピーは、ミルトン H エリクソンを源流とする短期心理療法の諸技法を指す。ここでは「効果的」「来た甲斐があったと思えるよう」といった意味で使っている。

17 Irvin D. Yalom 著 中久喜雅文・川室優監訳 (2012) ヤーロム グループサイコセラピー理論と実践、西村書店

18 スマープ (Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program) せりがや病院で覚せい剤等常習者治療にあたっていた時開発されたことからこの名称がつけられた。松本俊彦・今村扶美著 (2015) SMARPP-24 物質使用障害治療プログラム 金剛出版など

19 松本俊彦著 (2018) 薬物依存症 ちくま新書

20 治療共同体 (TC) については以下が参考になる。

平成 23 年度「アメリカにおける青少年の薬物乱用対策に関する企画分析」報告書 (内閣府)

https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/drug-h23-us/pdf_index.html

藤岡淳子編著 (2019) 治療共同体実践ガイド - トラウマチックな共同体から回復の共同体へ 金剛出版

21 田島良昭著 (2018) 一隅を照らす蠟燭に - 障がい者が“ふつうに暮らす”を叶えるために (中央法規出版) 第 6 章参照。南高愛隣会 HP : <http://www.airinkai.or.jp/jigyo/unzen>

22 新井利昌著 (2017) 農福一体のソーシャルファーム ~ 埼玉福興の取り組みから ~ (創森社)。埼玉福興 HP : <http://saitamafukko.com/>

23 長谷川直美編著 (2011) 精神科デイケア必携マニュアル - 地域の中で生き残れるデイケア (金剛出版)。えぞネット HP : <http://www.ezonet.or.jp/>、ほっとステーション大通公園メンタルクリニック HP : <http://www.ezonet.or.jp/>

令和2年度 文科省

「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

「セルフアドボカシー支援に向けた地域包括支援プログラム」の開発と実施

本人講座「キープセーフ for チェンジ 私の人生、グッドウェイモデルで行くよ！」

特定非営利活動法人 PandA-J 代表理事 堀江まゆみ

事務局 〒187-8570 東京都小平市小川町 1-830

白梅学園大学 堀江研究室気付

TEL 042-313-4589 Mail info-panda-j@shiraume.ac.jp
